

『研究紀要』通巻二十二号

一九七四年五月(能力開発工学センター)

# 心の形成を

## 町人はどう考えたか

—『日本永代蔵』による—

矢口 新

|                |    |
|----------------|----|
| はじめに           | 3  |
| 1 日本永代蔵の構造     | 4  |
| 2 永代蔵の商人群像     | 8  |
| 家職にかしこし—世の重宝   | 8  |
| 身過に油断なし—身の堅固   | 11 |
| 長者丸の調査—生活の設計   | 14 |
| 3 商人のいましめ      | 16 |
| 好色のいましめ        | 16 |
| 油断のいましめ        | 18 |
| おごりのいましめ       | 19 |
| 悪徳商法のいましめ      | 19 |
| 4 長者の性根—修業の目標  | 21 |
| 大腹中の算用         | 21 |
| 商いの根性          | 23 |
| 世の仁義           | 24 |
| 5 商人心の形成       | 27 |
| 身業の用にたため芸—教養とは | 27 |
| 商いの知恵—行動力の形成   | 31 |
| 奉公は主取り—生活は形成する | 32 |
| むすび            | 35 |

\*編集部注

原文では、本文内の各項のタイトルが目次と異なっている箇所があったが、目次に合わせた。

## は し が き

町人というのはわれわれ現代人の先輩であるといつてよいであろう。明治になってからその町人が自分達の生活のしきたりをもとにした世の中をつくつたのである。いな町人が自分でつくつたのではないかもしれない。しかし町人が自分の力ではばたきすることができ世の中になつたのである。いなもつといえは町人のしきたりをもとにして世の中をつくらねばならぬ世の中になつた。それは世界の大きな動きの中での人類の営みの一つであつたのであらう。

明治から百年間、町人は次第に自分の心を自由に表現する世の中をつくる努力をした。そうして今われわれがここに居るのである。百年の努力の結果、今われわれは豊かなものに包まれている。そのことは町人の努力の方向がすぐれたものであることを証明するものであらう。しかしあらゆるものに完全なものはないように、現代においてわれわれは心の不足に不安を感じ出している。その心の不足が不思議なことに物の不足をもたらしめているのである。

西鶴は町人の心を描いた作家として知られている。特に彼の町人物は外ならぬ現代のような社会を求める人間の心を描いたものである。特に『日本永代蔵』は物の豊かさを求める人間の心を描いたものといふことができ

る。いわば現代のわれわれの心を、その発足の時期において、原型的な形でとらえたものである。それがどういふものであつたかを見ることによつて、われわれの心の奥底に眠っているものをさぐり出すことができるかも知れない。西鶴は人も知ることく現実を描くことにすぐれた作家である。その行きついた所は人間のかなしさであるとも言われている。われわれは今、人間の喜びもかなしみも含めて、人間をとらえ直す時期に当面しているのではないだらうか。

『日本永代蔵』は町人の心を描いたものであるが、それに対してわれわれは心の形成の問題という点からレンズを当ててみた。それは西鶴の描こうと意図したものではなかつたかもしれない。しかしそれによつてわれわれは、一般に当時の町人が持つていてしかもそれを意識しなかつたものを把握することができたかもしれないと思つてゐる。そういうものが今後のわれわれの進む方向に何かの役に立つかもしれない。執筆は所長矢口新である。

昭和四十九年五月五日

## はじめに

『日本永代蔵』は西鶴のいわゆる町人物の中では最も広く読まれたものといわれている。元禄元年(一六八八)に初版が出たときから幕末(明治元年は一八六八年)までに何回も版を重ねて刊行されていることからその普及の程がわかる。そしてこのように広く長く人々に読まれた理由は、この永代蔵がもっている教訓色にあるともいわれている。この『日本永代蔵』に、西鶴は『新長者教』という副題をつけている。これは寛永年間に刊行された『長者教』に対して、新たな時代の長者教というわけである。旧『長者教』は中世的な教訓書、修養の書であるが、西鶴はこの新しい時代の『新長者教』に、それとは全く別な性格を与えている。西鶴はこの永代蔵によって教訓を考えていたとしても、しかし単なる古い形の教訓を考えていたのではないことは確かである。この六卷三十篇は一つ一つが特色ある物語として構成されているのであって、そこにはリアリズム作家としての西鶴の冷徹な目が取上げた商人と社会の現実が描かれている。それは単なる教訓書としての性格をこえている。いなむしろ反対に西鶴は現実を冷徹な目で描き、それを人々の前に呈示することによって商業のきびしさを教えようとしたのだといった方がよいかもしれない。

しかし今はその点について詳しく論ずる必要はあるまい。それはむしろこれからこの物語集を分析することを通じて明らかにすればよいと思う。ともかくここに西鶴が取扱った三十篇の成功や没落の町人物語がある。そ

こにわれわれは町人の中の町人としての成功者がどんな心をもっていたのか、いかなる過程で成功者となったのか、また反対に没落者がどのような心の持主であったのか、どのような原因で没落するに至ったかを分析することが出来るであろう。そしてそこから当時の町人の心がどういう心であったかを把握することが出来るのではないか。こう考えるのは特に西鶴の町人物が当時の社会の現実を現実として描いた作品と見てよいからである。もちろん永代蔵は、西鶴の筆を通して語られたものであるから、言うまでもなく西鶴の考え方、思想が表現されているのであるが、しかしただそれだけのものではない。ただ単に西鶴の主観が語られているというものではない。西鶴と同世代の人々とはもとより、それ以後江戸時代のおわりになるまでの二世紀近くの間、多くの人々に親しまれ、共感をもって迎えられることをみても、それはある意味で人々の思想なのである。それを読む人々は西鶴に託しておのれの思想や人生観を自覚して行っているのである。そう考えると、この作品の中から当時の人々の商人像に対する考え方を抽出するという考え方をしても間違いではあるまい。

ところで当面の問題は西鶴の思想全体ではない。その中の一つは教育思想である。といっても決して現代の人々のとかく考え勝ちな狭い意味の教育ではない。もうすこし広く考えて、当時の人々が、いかなる人間像を理想の人間像としていたか、少くとも商人の理想はどんなものであったか、どんな暮らし方をすることが商人としての本当の生き方であると考えていたのか、そういう人間になるにはどんな修業によってなのか、どんな能力を身につけることによって、その理想の人間像、長者になりうると考えていたのかなどを問題にしてみたい。

# 1 日本永代蔵の構造

この三十篇の成功と没落の物語は一篇一篇がまとまった短篇であるが、しかし同じ形式をとっているのではなく、それぞれに異なった構造をもっている。或は西鶴一流の哲学を説教風に述べた所があり、その間に具体的物語が入ったもの、或は一篇が主として一人の長者の成功物語になっており、それに彼の感想がつけ加えられているもの、或は成功から没落へと無常の姿を叙述して世の現実のきびしさを描いているものといった風に実に様々である。これらをどのように分析して行くかということは問題であるが、まずはじめに、一篇一篇のもっている構造をくずさないようにして、しかも全体を通じて成功と没落の二つの類型にわけて、すぐれた町人となるには、どのような心が必要であったか、没落はどのような心がそうさせたかを見ていくことにする。機械的に全篇を通して成功没落というように分けてしまうと、彼が重味をつけて描いたと思われる所を見失うおそれがある。それを注意して分析しなければならぬ。

まず一篇毎の構造を破壊することなくいくつかの類型に分類してみよう。前にも一寸述べたように、西鶴のまとめ方は必ずしも単純でない。成功物語として描いたもの、没落を描いたもの、その二つを組合せて一つにまとめたものなど様々である。またそれらの物語の間に入っている西鶴の人生哲学の述べ方も様々であり、彼の処世観を主としてそれに物語が附加

されてあるもの、物語に対して彼がしめくり的に人生論を展開したものなど一篇一篇が特色ある形をとっている。これらの述べ方自体が、彼の商人像に対する考え方をあらわしているとも言える。それが三十篇としてまとまっている所にもまた考え方があらわれていると言ってもよい。その構造をできるだけ保持させながら分析をして行くには、まず物語の類型にしたがって全体をいくつかに分類してみるとよいと思われる。

さて全体として成功と没落の二つの流れが大きく全篇の主題となっているので、この二つの底流を考慮しながら分類してみよう。

まず成功物語という類型にはいる中で、一篇全体が一つの成功物語としてまとめられた形のものがある。これらは多くが実在の人物を取扱っているものであつて、その当時の人々にはもちろん現代のわれわれもよく知っている長者を紹介している。極めて簡潔ではあるが、その人物の真ずいを描こうとしている。こういう種類のものが約七篇ある。

- 巻一の四 昔は掛算かけざん今は当座銀とうざぎん
- 巻二の一 世界の借屋大将かしや
- 巻二の四 天狗は家名風車いゑなかざぐるま
- 巻二の五 舟人馬かた鎧屋の庭あふみや
- 巻三の一 煎じやう常とはかはる問葉せん
- 巻四の一 祈る印の神の折敷しるし
- 巻四の五 伊勢海老の高買たかがい

これらの篇は、西鶴が積極的に長者の人間像そのものを正面から描いたもので、それらによつて当時の人々がすぐれた商人の心をどのようなもの

と見ていたかを把えることができよう。

これらの物語については、後で詳しく紹介するので、ここでは全体としての傾向を述べておこう。この類型は更に二つの類型にわけて見ることができる。一つは主として商いそのものについての話となっているものである。他の類型は、世帯のもち方を主として述べているものである。この二つを組み合せた物語もあるが、ともかく中味の要素となっているのは、商いと世帯の持ち方の二つである。

次にこの事例と丁度反対の事例としていわゆる没落物語がある。これは商人の心としては何が望ましくないかということを見るものとして、成功物語からとらえられることを裏からとらえたものと考えることができ。

ところで没落といっても、またさまざまな類型のものがあつて、西鶴はそれをいろいろに描きわけている。初代は成功したが、二代目になると初代の苦心して蓄積したものを忽ち無に帰してしまうという例、或は一代で産をなし、その産をなしたことが却つて仇となり、欲に目がくらんで結局はまた没落してしまう例など、無常を思わせるものを描いている。いかに商人心というものを代々維持しつづけることがむづかしいかということの例でもある。それだけにまた商人心というもののきびしい中味を描いているとも言えるのである。そこには彼がよく使う世の仁義とか、油断なくとかいうことの内実が何であるかをしみじみと考えさせるものがある。

ここではまず初代の成功、二代目の没落という形のものと、一代で成功・没落の運命をたどったものとの二つに分類して篇名をあげておこう。

## 二代目没落物語

巻一の二 二代目に破る扇の風

巻三の五 紙子身代の破れ時かみこ

巻五の三 大豆一粒の光り堂まめ りゅう

巻五の五 三匁五分曙のかねあけぼの

巻六の一 銀のなる木は門口の柵かね ひらぎ

## 前半生成功後半生没落

巻三の二 国に移して風呂釜の大臣

巻三の三 世は抜取りの観音の眼まなこ

巻四の四 茶の十徳も一度に皆じっとく

巻六の四 身代かたまる淀河の漆うるし

このうち、巻五の三、巻六の一などに描かれた初代の生活ぶりは立派なもので、それだけならむしろ成功の類型にはいるのであるが、二代目でその財産はすっかり無に帰している。それだけにあわれさを感じさせるものがある。巻三の二の物語も前半生は立派な長者の心を感じさせる仕事ぶりであるが、京都へのぼつて都の風にそまって忽ち好色の道に迷つてこれまた財産を蕩尽とうじんしてしまうのである。一体西鶴の没落物語の没落の原因の多くは好色にあるが、好色というものの恐ろしさを彼はいたる所でくりかえし描いているのは興味深いことである。

以上述べたのは、成功と没落のどちらかに正面からとりくんで西鶴が描いたものと思われるものである。

しかし西鶴は以上のようなアプローチとはちがった面からも商業の世

界の実態や商人心のあらわれを描いている。もちろん上に述べた一つ一つの物語の中にもそれぞれちがったモチーフが動いているが、しかし描き方自体もまたがらりと異なったものがあるのである。たとえば、

卷一の三 浪風静かに神通丸 じんずうまる

は、副題に「和泉にかくれなき商人、北浜に箒の神をまつる女」とあるが、この一篇には確かに北浜に住む後家が、その浜に西国米を水揚げの時、米刺の筒からこぼれ落ちた米をはき集めて次第に産をなしたという物語がついているが、それはしかしむしろ附随的である。彼が語りたかったのは、北浜の米市の盛況であり、そこで売買をする大商人たちの大腹中であり、その大商人たちの丁稚時代からの生い立ちであった。そういう北浜物語の中で彼は、大商人たちもみな性根によつて自分をつくりあげたのだと語っている。これがこの篇の主題で、その最後に後家の話が出て来る。つまり塵も積つて山となるのだという話なのである。この篇は、一人の長者の成功物語やまたその反対の没落物語のように簡単な筋でなく、手がこんだ語りになっている。次の四篇などはそういった類型の篇と見てよい。

卷四の三 仕合の種を蒔銭 しあわせ まきせん

卷五の一 廻り遠きは時計細工

卷六の二 見立てゝ養子が利発

卷六の三 買置は世の心やすい時 かいおき

『仕合の種を蒔銭』というのは伊勢の内宮外宮の間一里ばかりの道で銭二百貫をまき散らした分限者の話となっているが、それも塵も積つてのことだという話である。『廻り遠きは時計細工』は金餅糖づくりの秘密を発見して産をなした話であるが、それにひっかけて、分限になるには何かの種

がなくてはとてもむづかしいということを、江戸や上方の手代が語り合うという話になっている。『見立てゝ養子が利発』は商売上手な養子がまたたく間に分限になったという話の中で、およそ商売心とはどんなものかを述べている。『買置は世の心やすい時』は、毎年元日に遺言状を書いて四十才以後は何時死んでもよいという覚悟で正直に世渡りをして分限になった堺の小刀屋という長崎通いの商人の話であるが、相場の安い時の買置きが産をなすもとであったという。しかしこの人の商人としての本領は気まえのよさという所にあった。財産がまだ銀四十貫程度のかげ出しの頃、自分の息子の死病を助けてもらった医者に銀百枚、真綿二十把、二斗樽に干鯛という薬代、しかも医者に屋敷を求める世話までしたという此の気前のよさが分限になるもとであったという物語である。

また一度は失敗したが、その経験の上にかえつて産をなしたというような筋の中で、商人心を問題にしている篇がある。

卷二の三 才覚を笠に着る大黒

卷四の二 心を畳込む古筆屏風 こひつびょうぶ

卷五の二 世渡りは淀鯉のはたらき いづなこ

商売に使われる手練手くだを語り、世渡りのむづかしさを語る。必ずしもそれは好ましいものばかりではないことは西鶴も認めながら描いている。しかし一方で西鶴は、世の仁義などという言葉をいろいろな場面で見つけている。その点を象徴的に描いているのは、次の二篇である。

卷一の一 初午は乗つて来る仕合

卷三の四 高野山借錢塚の施主 しやくせんづか

ともに借金を正直に返還した話であるが、西鶴の語りたいことは、両者とも律義な働き方を積みあげるということであるが、前者はそれを表から、後者はそれを裏から述べている。むやみに欲をかくこと、計画倒産で人をごまかすことなどのおろかさを述べているのである。

西鶴の目には、世の中の無常ということが常にうつっていたらしく、さまざまな人々の営みのもう一つ底にある無常を描こうとしていたように思える。そういう点が全篇の随処にわたって見られるのであるが、次の二篇などは、そのことを中心にして語っていると見てもよいであろう。

卷二の二 怪我の冬神鳴けが ふゆがみなり

卷五の四 朝の塩籠夕の油桶あした ゆふべ

さまざまな人のくらしぶり、過去から現在への暮らし方の転変を述べる中に人の世での生き方を説いている。

永代蔵の中でただ一篇女性を主人公にした物語がある。

卷一の五 世は欲の入札に仕合いれふだ しあはせ

であるが、昔ならした晒布の買問屋松屋の女房が三十八才で後家になる。この時はもう借金しか残っていないという落ちぶれ方であったが、この後家は一寸見は二十七く八にしか見えない美しさであったが、子供のことを思つて、再婚せず切り下げ髪で、男もおよばぬ才覚を働かして一家の切りもりをしていた。しかしなかなか思うように行かない。一世一代の知恵を出して住宅を頼母子の入札にして売る。一人から銀四匁をとり札に当たった人に家を渡すという方法で、結局銀十二貫を受けとり五貫目の借金を払つて、残りをもとでにして再び分限になったという。

この篇は、前段は縁組の哲学とも言うべきことがかなり詳しく述べられている。今時の仲人はもうけずくでする人が多く、嫁をとる方も見かけを飾つて持参金を目あてにするというのが多いし、嫁にやる方も先方の財産を目あてにする。また身代ばかりでなく諸芸を心得ている人を贅と願うと博ちうつとか、傾城狂いとかが多い。男がよくて身過にかしく世間を知り、親に孝行で世のためになる人と欲をいかけてもそんな人は見当る筈がない。小男でも禿頭でも商売ができて親の身代よりへらさぬ男なら縁組するがよいという哲学である。

最後に全巻のエピローグとしての篇が

卷六の五 智恵をはかる八十八の枰ますかき

で、三代揃った夫婦がいずれも仲よく暮して家がおさまっているめでたい話を紹介しているが、この前段は商人の人生哲学ともいうべきものを述べている。この四五十年世間は不景気になったというが、しかし人の暮らし向きはだんだん豊かになっているようだ。渡世はさまざまだが結構なんとかやって行けるものである。それにつけてもただ暮しているだけでなく、なんとか若い時からうんと稼いで分限の名を世に残したいものであるというような、そこはかとない語りである。

## 2 永代蔵の商人群像

成功物語などという言い方は余り適切でないが、ここで取上げるのは、西鶴が正面から一人の人物を主題にして、長者の中の長者らしい人としてその仕事ぶり、暮しぶりを描いている七篇の物語である。つまり七人の人物が取扱われていることになるが、それぞれが個性のある人であるから、それらを短い一篇に描くには苦心があつたであろう。しかしまたそれだけに、最も特色のある所がそれぞれの人物でとりあげられていると言ふこともできるかもしれない。

その中でも巻一の四『昔は掛算今は当座銀』は人物が有名な三井八郎右衛門であることもあつて、興味深い物語である。そうしてこの篇での描き方は、一つの典型とも言えるもので、おなじような描き方が随処に出て来るのである。まずこれから取りあげてみよう。

### 家職にかしこし ― 世の重宝 ちようほう

この三井九郎右衛門の話は有名な話で、いわば実話といってよい。本名は三井八郎右衛門である。西鶴はこれをモデルにして小説の中では九郎右衛門という名で、その商売の成功談を取扱っている。この篇は全く商業の問題をテーマにとりあげているといつてよい。彼がのべている江戸の商況

のことは、多くの書物によく引用されている。「以前とちがひ今繁昌の武蔵野なれ共、隅から隅まで手入れて、更に掴取りもなかりき」という江戸で、三井九郎右衛門が「又商ひの道は有る物」だと感心させられるような商法を生み出し「毎日金子百五十両つつならしに商売しけるとなり」という話なのである。

実際に三井八郎右衛門が駿河町に越後屋呉服店を開店したのは、天和三年(一六八三)であつて、この頃はもういわゆる商業資本主義時代といつてよいような時代になっている。このことを西鶴は更に掴み取りのない状態だというように述べているのである。越後屋の商売である呉服のことに關していえば、日本橋本町呉服屋町には諸大名出入りの格式のある店が軒をならべていて、そこへ割り込むすきもないような状態になっている。八郎右衛門は延宝元年(一六七三)に江戸へ出て来ているが、その頃の状態を西鶴は次のように記述している。

「近代江戸 しずか 静にして、松はかはらず常盤橋、本町 ほんちようごかくしよ 呉服所京の出見世 でみせ 紋付鑑 もんつきがみ にあらはし、棚守・手代 たなもり それぞれに得意の御屋敷へ出入り、ともかせぎに励みあひ、商売に油断なく、弁舌・手だれ・智恵・才覚、算用 わろがね たけて悪銭をつかまず、利徳 いきうし に生牛の目をくじり、虎の御門 あした の夜をこめ、千里に行くも奉公、朝には星をかつき、秤竿 はかりざお に心玉 だま をなして、明暮御機嫌 あけくれ とれども」

昔のように江戸では掴み取りなどといううまい汁を吸うことはもう夢のように去ってしまったというのである。この頃諸大名の勝手もとは次第に苦しくなり、昔は御祝言などには小納戸方の役人の手ずるで出入商人が一もうけしたものだ、今はすべて入札制となり、商人達が互に競争する



ようになったので、利益が少なくじり貧状態になって来た。そればかりか  
 売掛代金は年々未払がたまるということも当り前となり、利益は減る一方  
 で両替屋の利息にも及ばぬ程度となって来たが、かと言って店仕舞もなら  
 ず、商売は縮小するばかりであつたというように西鶴は語っている。

そこへ出現したのが大名相手の商いをやめて大衆相手の革新的商法の  
 三井商法である。

「面九間に四十間に棟高く長屋作りして新棚を出し、万現銀売に  
 掛値なしと相定め、四十余人利発手代を追ひまはし、一人一色の役  
 目たとへば金らん類一人、日野郡内絹類一人、羽二重一人、紗綾類  
 一人、紅類一人、麻袴類一人、毛織類一人、此のごとく手分けをし  
 て、天鵝絨一寸四方、緞子毛貫袋になるほど、緋繻子鍮印長、竜  
 門の袖覆輪かたかたにても、物の自由に売り渡しぬ。殊更俄か目見  
 えの襲斗目いそぎの羽織などは、其使をまたせ、数十人の手前細工人  
 立ちならび、即座に仕立てこれを渡しぬ。」

掛値なしの現金売りとか、商品の種類によって手代一人一人に分担させ  
 るとか、今でいう分割売りともいうか小切れにして売る方法とか、職人  
 をおいてその場仕立てを引受けるとか、今日で言えば呉服だけのデパート  
 とでも言う方式は、当時の人々にとっては全くよく考えたものという感を  
 深くしたものであろう。西鶴はこれを評して、「此亭主を見るに、目鼻手  
 足あつて外の人にかはった所もなく、家職にかはってかしこし。大商人の  
 手本なるべし」と巧に当時の人々の世評を代表して述べている。恐らく当  
 時の人々は全く普通の人とかわりないのに、知恵の出し方はなんとすばら  
 しいものかという感を抱いたのであろう。同時にそれが、一般大衆へのは

かり知れない便宜を供与したことも確かであり、それが毎日平均百五十両  
 という商売になったのであろう。西鶴も「世の重宝これぞかし」とその社  
 会的意義をはっきり認めている。

西鶴は「惣じて親のゆずりをうけず、其身才覚にしてかせぎ出し、銀五  
 百貫目よりして是を分限といへり、千貫目のうへを長者とは云ふなり」と  
 という定義を下しているが、こういう考えからすると、この八郎右衛門は大  
 商人の手本であらう。(銀一貫目は十六両位としてよいから千貫目は一万  
 六千両余り、現在の相場で銀一貫目五十万円に当たるとすると五億というこ  
 とになろうか。)

西鶴の三井九郎右衛門物語は家職以外のことは全然ふれていない。そう  
 いうことはもう言うに及ばぬ程あざやかな才覚振りということであろう  
 か。ともかく商業者の理想像として見られているといつてよいようである。

いまこの三井物語のような物語を家職型という名前をつけると、この家  
 職型に属するのは七篇の成功物語のうちで、巻二の四『天狗は家名風車』  
 と巻二の五『舟人馬かた鍮屋の庭』というのがこの型に属すると考えて  
 よいようである。その二つを次に紹介しておこう。

巻二の四は、天狗源内という人の話で源内は鯨突きのもりの名手であつ  
 たので、人々は彼を雇って鯨舟を仕立てた。そして或るとき丈三十三ひろ  
 という大物の鯨を突き、この鯨一匹で村中がにぎわった程であつたが、源  
 内はこの骨をもらつて油をしぼり、それで分限ぶんげんになった。西鶴は「銀五百  
 貫よりして是を分限といへり」(第一巻の一)と言っているから相当な金  
 持ちになったわけである。鯨油を使う下々の人のためには大層な利益にな

ることを、今まで気の付かなかったのは愚かなことであつたと西鶴は註をいれているが、逆に言えば源内の発見は世の重宝ということなのである。更に工夫をして、鯨網をこしらえて見つけ次第に取り損することがなくなり二百人余の獵師、舟八十艘をもって大変な長者になった。

ある正月の初まいりに人よりおくて行くともう参る人がなく、神主たちは賽銭の勘定ばかりしてゐてろくにお神樂もあげてくれない。神のことながら腹が立つて末社もざつと廻つて帰つたが、その帰りの舟の中でうとうとすると、恵比須殿が夢にあらわれて、弱つた鯛の腹に針の立て所がある、尾先から三寸ほど手前を尖つた所で突くと生きかえるとの御告げがあつた。やつてみると案の定鯛を殺さずに運ぶことができ、これでまた身代が大きくなつたというのである。

この物語は技術をもつ人の成功物語といつてよいが、それが世の人々の重宝となるところに成功の理由があることを語っている。源内の成功は自分の仕事にうちこむ所から生れたといつてよい。それが新たなやり方、知恵を生み出すもつたのである。

次の『舟人馬方ふなびと鑑屋あふみやの庭』というのは六代目鑑屋惣左衛門の物語で、これは旅館の経営の工夫を中心にして記述されている。それまでは小さな旅人宿をしていたが、この人の代になつて「其身才覚にて近年次第に家栄え、諸国の客を引請け、北の国一番の米の買入れ、惣左衛門といふ名を知らざるはなし」となつた。間口三十間奥行六十五間の屋敷に家や蔵を建て、特に台所の有様が目ざましいものがあつた。様々な仕事を一人一役に割当てて分担してうまくさばっている。米味噌出し入れ係、たきぎの受け取り係、肴の係、料理係、椀家具の部屋を預る係、菓子係、煙草係、茶の間係、湯

殿係、更に使い番、商手代、家計手代、金銀の渡し係、収入帳係、等々である。亭主は年中袴をはいていつも小腰をかがめており、主婦は身軽ななりで居間をはなれず、朝から晩まで笑顔で応対している。座敷の数も限りなく客一人に部屋を一つずつわたし、女中も三十六人居り、女中頭がいて指図をして働かせている。問屋というのは一年中の収支は正月元日にならぬとわからぬものだが、鑑屋では来年中の台所用品を十二月に買いこんでおき、その後は一年中にはいつて来る金を長持に落とし穴をあけていれておくというやり方で堅実な経営をした。それで諸子の商人の買入れの世話をする問屋として安心のおける問屋であつた。

この話には附けたりがある。この鑑屋へとまる客の仕事の仕方をみると、ここへ着いて早速道中着を着かえて名所を見に出かけるような人は出世したことがない。ここへ着くやいなや手代の所へ来て相場のこと、天候と作物の関係など、紅の花の出来具合(染料)、麻の皮の相場と矢次ばやに問いかける人は間もなく旦那より身代よしとなる。商売にどれだけ身が入っているかが大事な所というわけである。

以上の話はどれも家職にかしい例であるが、三井物語も含めて、西鶴が取りあげているのは独創的な商い、工夫ということである。それが結果として「世の重宝」となつて人々を喜ばせているということも西鶴の強調している所である。彼の現実を見る目の冴えとも言えるが、一方から見れば当時の人々がみな重宝していたのであろう。それだからこそ成功者として人々にもてはやされたのである。

さてこの創造的、独創的な工夫というのはどこから生れるのであろうか。それはこれから見て行きたいことである。

## 身過に油断なし — の堅固

以上の家職物語とちがったタイプの事例が巻二の一『世界の借屋大将』と名をつけられた藤市の物語である。「此藤市利発にして、一代のうちにかく手前富貴になりぬ」とやはり独力で富をなしたことをまず第一に述べている。しかし西鶴の藤市に対する記述の仕方は、こんどは家職の方ではない。その方は殆んど述べていないと言ってよく、重点はその世帯もちの方にある。この藤市の実在のモデルは初代藤屋市兵衛で『町人考見録』によると、「長崎へ通ひ商売致極て商人心成者故」といわれて、その家職についてのかしこさが述べられている。また「其身持質朴成者にて、此の市兵衛がしまつ咄諸人の多知る所、猶草紙永代蔵などに是を書載す」と述べられている。西鶴はこのしまつ咄をこの篇で取扱っているのである。

西鶴の藤市しまつ咄は、「第一人間堅固なるが身を過ぐる元なり」という叙述からはじまっている。「此男家業の外に反故の帳をくくり置きて見世をはなれず、一日筆を握り」両替屋の手代が通れば銭や小判の相場を聞いて付けておく、米問屋の売買を聞く、木薬屋、呉服屋の若い者には長崎の様子を聞くという様にすべてを記録して置くので「紛れし事は爰に尋ね、洛中の重宝になりける」ということになった。今の言葉で言えば情報収集であり通信社の仕事であろう。これを西鶴はやはり世の重宝となつたという言い方で、この仕事の意義を深めている。

次に続くのが「不断の身持云々」ということになってしまつ咄になる。まず衣について肌にひとえじゅばんを着、その上に綿入れ以外は年中着たことがない。袖の所を縫いぐるみにした袖覆輪というのもこの人がはじめ

たのである。革足袋にせつたをはいていて、道を歩くに走つたことがない。一生の間には絹物を着たのは袖だけ、一つは花色染、一つは海松茶染にしたが、これは染めかえしがきかないのをくやむという有様。また紋付は作らず、土用干にも畳の上にじかにおかないという気のくばりようで長もちさせた。町内の葬礼などには鳥部山におくつてから人よりおくれて帰る途中、せんぶりを根引してもって帰り、陰干にして腹の薬にする。けつまづいた所では燐石を拾つて帰る。

こういう身のもちように対して、西鶴は、「朝夕の煙を立つる世帯持は、よろずかやうに気を付ずしてはあるべからず」とほめている。また此の男は生れつきけちなのではない、すべての生活の仕方において人の模範になるうという心がけからであると西鶴は註をいれている。

つづいていくつかのエピソードが述べられる。この人は自分の家で餅をついたことがない。それも人手やら道具やらを計算して合理的な方法をとる考え方からである。ある年、餅屋がつき立ての餅を持って来たのを手代がはかりにかけて受取ったが、藤市があとでひえてからはからせて意外に目方がへっているのを見せて餅の受取り方一つにも気の遣いようがあると言ったという話。

また、東寺あたりの百姓が茄子の初なりを売りに来たとき、一つ二文、二つ三文というのでみんな二つ買うのに藤市は二文で一つしか買わず、出さかりになればあとの一文で大きいのが買えるという計算の仕方はきわめて合理的であるという話。

屋敷の中には柳、柊、ゆずりは、桃の木、花菖蒲、じゅうだまなどを植えて、いずれも実用的に使えることを考えている。一人娘にその使い方を

教えようがためである。また朝顔もなためでもおなじながめだというの  
で庭の垣根にも実的なものを植えたという話。

娘に嫁入屏風をこしらえてやったが、京都の名所づくしでは娘が行きた  
がるだろう。源氏物語、伊勢物語では浮気になるだろうから、多田の銀山  
の盛りの有様を描かせた。こういう心掛けでいろは教訓歌を作つてよま  
せ、寺子屋へはやらす家で読みかきをおしえた。娘も親の世帯の持ち方に  
ならつて子供の時から墨で袂をよごすようなことはせず、節句のひな遊び  
もせず、盆にもおどらず、毎日髪も自分ですいて丸髷にゆい、身の廻りの  
ことは人の手をわずらわすことなく、真綿の引きのばしもたて横一ぱいに  
つくりあげるといふ気のきいた娘に育つた。

近所の人がむすこ達に長者になる心がけを教訓してくれるようにつか  
わすと、ちようど正月七日の夜であつたが、娘はお客が来るまでは燈心を  
一筋にへらして待つて居て客が来たときあかるくして台所へ行つた。三人  
の客が座についたとき台所ですり鉢の音がしたので客たちが、何のこちそ  
うかとうわさをする。そこへ藤市が出て七草のいわれは神代の時代のしま  
つはじめで雑炊のおしえ、掛鯛かけだいを六月まで荒神の前におくのは朝夕肴ちようせきを  
食わずに見て食うた心で暮せという教え、柳の木で作つた白木の雑煮箸は  
よくれたら白くけずつて一ぜんで一年中使うという教えなどと語り、すべ  
てに氣をつけることが肝心と注意する。さて夜もふけて本来なら夜食の出  
る所だが、出さないのが長者になる心がけというもの、宵のうちの摺鉢の  
音は大福帳の上紙にひく糊をすつていた音であると説明した。

西鶴はこのしまつばなしの中でよくよく万事に氣を付ける必要がある  
という言葉をも二度使っている。恐らくあらゆることにしまつの神経を浸透

させて生活することが長者になるもとだと言いたかつたのであろう。始末  
というのは現代語で合理的といったらよいかもしれない。無駄を省くとも  
言えよう。虚飾を去るともいえる。ただのケチケチではないところが興味  
深い所である。

このタイプの話も西鶴の多くの物語の中のもう一つの典型的な例といつ  
てよいのである。もう少し西鶴の意図を付度して言えば、永代蔵に二つの  
主題があつて、一つは三井九郎右衛門を語つた語り方、もう一つは藤市咄の  
語り方で、この二つがさまざまに組合わさつて、さまざまな物語ができてい  
るとも言えるのではないか。その意味では、逆にこの二つが、西鶴の語る長  
者への道の二つの基本的な生き方であると言つてもよいかもしれない。

ところでこれに属するのは、巻四の五『伊勢海老の高買』たかがいである。もち  
ろんここに型というのはここに取上げた人物の型ではなく、物語の主題が  
そうだということである。この型に名称をつければ始末話とでも言うべき  
であろう。

『伊勢海老の高買』では樋口屋(実在という)の物語であるが、どちら  
かと言えば始末型に属するといえよう。この人「世渡りに油断なく、一生  
物の費えになる事せざり」といふ人である。例えば正月の伊勢海老の代り  
に車海老、だいだいの代りに九年母くねんぼを使うというやり方をして人々に知恵  
者だといわれた。或る時夜更けに樋口屋の戸を叩き酢を買ひに來た。下男  
が目をさましてどれ程かと聞くと一文というので空寝入りをしてしまふ。  
その翌日樋口屋は下男に門口を三尺掘らして錢が一文出ないことをさと  
らせ、一文商いを大切にすることを教訓する。連歌師の宗祇が堺に來られ  
たとき、貧しい木葉屋が歌会を開催したが、途中で三文の胡椒を買ひに來

た人に商いをして、それから静かに一句を付けたのをまことに奥ゆかしい心であると宗祇がほめられた。このように勤めるのが誠であると教訓する。

つづいて樋口屋の世帯の切りもりの教訓話が始まる。「我そもそもは少しの物にて、一代にかく分限になる事、内証の手廻し一つなり、是を聞き覚えてまねしなば悪しかるまじ。」例えば借家ずみの人は毎日その割にして家賃をのけておくがよい。借金も利子を一ヶ月を重ねぬように支払って行けば、いつかは商売ができるようになる。借金の返し方はもうけのある時その半分をのけておき、元金が一貫目ならその十分の一を年に入れて行けば十年で返済できる。帳面で決算をするな。小遣帳を付けてみると同じ買物でもちがいがあふ。商売のない日は少しのものでも買物をしないこと。通帳で買物をしてはならぬ。家屋敷を質におく程ならば、売り払った方がよいなどと教訓をしている。

この話のはじまりは借金の話からはじまっている。掛売をし、掛買をして年中をくらし、くれになつて正月の仕度をするくらし方はあまり合理的でない。帳面合つて銭たらずの生活になるという所からはじまって儉約というのは正月の支度からはじめるべきだといふのである。また樋口屋の話の途中に堺の町の商人の気風を語って、人の身持がしとやかで、そろばんを忘れず、家計に注意して、義理がたく、優雅な土地柄である。一寸他所者の住みにくい所で、元日から年の暮れまで予算をたてて、無駄遣いしない土地柄である。男は紬<sup>つむぎ</sup>縞<sup>しま</sup>の羽織一枚を三十四五年も洗濯しないし、女は嫁入着物をそのまま娘にゆずるといった気風である。大阪はそれと違って、ぼろもうけをするので暮し方が派手である。堺は始末で生活し、大阪は派手で暮す。それにしても身代のよい人はどこでもよい扱いをうける。

いかに利口でも、生活が不如意では、人は言うことを聞いてくれないものだ、だから若い時心をくだいて、老いの楽しみを早く味わうのが肝心だと西鶴の哲学が述べられている。

樋口屋の話は商業者として仕事を大事にするということはどういうことかということ物語っている。現代語でいういわゆるサービスピ精神ということが、西鶴流に奥ゆかしい心として述べられている。つまり金の額によつて商いをするのではないという考え方である。一文商いを大切にするというのは、一つ一つ眼前の仕事を大切にすることである。樋口屋自身の言葉を使つていえば、誠の心というものである。それは世帯の切りもりについても言えることである。内証の手まわしの一つについて同じ心で処理することを樋口屋は語っているのである。

前の藤市の話もそうであつたが、萬事に合理的といふか、無駄なくといふか、西鶴が藤市物語で述べている「此男生れ付いて吝<sup>しわ</sup>きにあらず。萬事の取廻し人の鑑になりぬべき願ひ」という心掛けがここでも語られている。その合理的な精神といふべきものを西鶴は次のように述べている。

「されば蓬萊は神代此かたのならはしなればとて、高直<sup>こうじき</sup>なる物を買ひ調べて、是をかざるに何の益なし。」

そこで伊勢海老でなくとも車海老でもよいのではないかというように考えるのである。また一文商いを大切にするのは、「人はみな此ごとくの勤め誠ぞかし」という考え方なのである。内証の手まわしといふのもそういう合理的な考え方なのである。

七篇の成功物語のうち残りの二篇は、家職型と始末型の二つを組み合わせた物語といつたらよいであろう。

# 長者丸の調査 ― 生活の設計

『煎じやう常とはかはる問葉』というのは有名な話で、人口に膾炙している長者丸の妙薬の話で、その実証的人物として箸屋甚兵衛が出て来る。実在のモデルは鎌倉屋甚兵衛であろうといわれている。この話は四十才になるまで貧乏であつた人がその治療薬を聞いたという想定で話のはじまる。これが甚兵衛である。

「今迄それをしらず、養生ざかりを四十の陰まで、うかうか暮されし事よ、少し見立おそれども、いまだよい所あるは、革足袋に雪踏を常住帯かるゝ心からは、分限にもなり給はん。」

と言つて長者丸の妙薬を教えることになっている。

「長者丸といへる妙薬の方組伝へ申すべし。△朝起五両 △家職二十両 △夜話八両 △始末十両 △達者七両、此五十両を細にして、胸算用秤目の違ひなきように手合せ念を入れ、是を朝夕呑込むからは、

長者にならざるという事なし。」  
これが長者丸である。そしてこれには大事な毒断ちがあるといつて、その毒の種類があがつている。大変な数にのぼっている。

- 美食淫乱絹物を不斷着 ○ 内儀を乗物、全盛娘に琴歌賀留多
- 男子に万の打囃 ○ 鞠楊弓香会連俳 ○ 座敷普請、茶の湯教奇
- 花見舟遊び日風呂入 ○ 夜歩行博突碁双六 ○ 町人の居合兵法
- 物参詣後生心 ○ 諸事の扱ひ請判 ○ 新田の訴訟事金山の仲間入
- 食酒莚若好、心当なしの京のぼり ○ 勸進相撲の銀本奉加帳の肝入

○ 家業の外の小細工金の放目貫 ○ 役者に見しられ揚屋に近付  
八より高い借銀。先づ此通りを斑猫砒霜石より怖しく、口にしていふも扱置き、心に思ふ事もなかれ。」

とささやかれて甚兵衛は奮起一番するのである。江戸の町の繁昌を眺めて何かよい仕事はとさがすが、なかなかもつて銭一文落ちていない。何かないかとさがすうちに、武家屋敷で働いた大工や屋根葺きが二三百人一同となつて帰つて行くが、後からついて行く小僧に背負わせた鉋屑や木端が後へ落ちたのも拾わないでいく。これを拾つて行くと駿河町から神田の筋違橋までの間に一荷にあまる程集つた。これを見ると二百五十文となつた。こんな足もとにころがつている事に氣のつかぬことはうかつだつたと、その後は毎日拾つて五荷位になつた。雨の降る日は此の木屑から箸を削つておろし売りをして箸屋甚兵衛という名が次第に知れるようになった。その後材木を商売として四十年の間に十両となり、七十余才になつて、これからは少しの不養生はおかまいなしと以後さまざま道楽、今で言えば余暇を楽しむ生活をする。

上下とも飛騨紬を着、食事もぜいたくし、築地の門跡に日参、芝居見物、夜は碁の友を集め、茶会、花の会など何でもして暮した。此の人が一生けちで富士山ほど金をもつていても結局死ねば武蔵野の土、橋場の煙となる身であるということをよくわきまえて、老後の生活の立つようにして、楽しい暮しをし、人々に重宝がられて一生を終つた。人々は若い時貯えをして年寄つて施しをすることが大切ではないか。とてもあの世へは持つていけないが、現世ではなくてならぬのが金である、と西鶴は結んでいる。

こうしてみると毒断ちというのも一生毒断ちをしるというのではない

のである。功成り名とげてという言葉があるが、その上での道楽は差支えなしということであろうか。尤もそれは道楽ということなのか。この甚兵衛もそのような楽しみを「いつならひ初められしも見えざりしが、銀さへあれば何事もなる事ぞかし」というようにいつの間にか物にしている。それが何時からか見えないというのは、仕事がいとも中心にあつて、楽しみが陰にかくれていたからかもしれない。そういうバランスが甚兵衛の生活をつくっていたのであろう。長い一生における生活の統一、仕事と余暇の楽しみとの統一を西鶴は問題にしているようである。仕事という核のない所の道楽はいわば余暇ではない。それはズルズルとひきずられて墮落するものになる。ということをや西鶴は言っているであろう。そのことは後で問題にしてみよう。

巻四の『祈る印の神の折敷』は貧乏神を祭ったという實在の桔梗屋甚三郎の話である。貧乏神を祭ってそのお告げに柳は緑花は紅とあつたのをよくよく工夫して、蘇芳で下染めしてその上を酢でむしかえずと紅花で染めたのとすこしもかわらぬことを発見し、荷物をかついで江戸に下り、本町の呉服店へ売り、帰りに奥羽の絹綿を仕入れて、いわゆる鋸商いをして十年たためうちに千貫目以上の分限者になったというのである。

この話の前段には、福をさずけてくれた貧乏神のお告げという形で貧乏哲学というより、しまつ哲学がついている。自分は家の主婦に付きまとう神であるが寝間に入って重ね蒲団に釣夜着、パンヤのくくり枕など、白むくの寝巻に香がたきしめてある香、花見芝居の乗物にゆられること、夜蠟燭の光が全襖にうつるまぶしさなどが大きらいだ。それより不自由なのをみるのが好きで、家々を衰微させる努力をしたが、そのため人にきら

われた。今お前が俺を大事にしてくれたので「此家の貧銭(財)を二代長者の奢り人にゆずり、忽ちに繁昌さすべし、それ身過は色々あり」といつて前述の御告げをするのである。つまり世帯もちはこの貧乏神が好むようなやり方がよく、それに家職が加われば鬼に金棒ということなのであろう。後の方には「此人数多の手代を置きて諸事さばかせ、其身は楽みを極め、わかい時の辛勞を取りかえしぬ。是ぞ人間の身の持ちやうなり」として町人の処生哲学が述べられている。まず金をためることの意義が述べられる。

「たとえば万貫目持ちたればとて、老後まで其身をつかひ、氣をこらして世を渡る人、一生は夢の世とはしらず、何か益あらじ」

とただ死ぬまで金をつくることばかりに努力することのおろかさを述べる。次に人間として家業への態度が述べられる。侍にしても、商人にしても、ただ親のゆずりを受けて「あたらし世をうかうかとおくり」というのでは意味がない。金のあるにまかせて、二十才前後から無用の竹杖・置頭巾などというくらし方は、天命を知らぬ思い上りである。

「人は十三才迄はわきまへなく、それより二十四五までは親のさしずをうけ、其後は我と世をかせぎ、四十五迄に一生の家をかため、遊樂する事に極まれり。」

「町人の出世は下々を取合せ、其家をあまたに仕分くるこそ親方の道なれ。」

つまり一生の働き方を述べているのである。十三才まではわからずや、二十四五迄が修業、四十五迄が働きざかり、それ以後が人生を楽しむということになる。町人に生れて自分の召使いを取立てて、家の暖簾を分けてやるのが仕事でなくてはなるまい。「これを思はば暫時も油断する事なかれ」というのである。これは前の長者丸の実践的事例として考えてよい

であろう。

これら西鶴の話の中からうかがえるのは、知識などというより、行動力というようなものである。家職にかしいという例でも、さまざまな知恵才覚を働かしているのは、決して知識を得たからではないようである。むしろ現実を見て、そこから新しいものを生み出す創造力である。更にそのことが必ず一般大衆のための重宝となっているということである。ただ単に金をもうける、利益をうるといふことの工夫でないということである。むしろ結果として分限になっているのであって、やった行動そのものは人々の重宝な仕事を発見する能力が大切なものとして認められていたのである。そのことを人間として大切にせよと西鶴は言っている。世の人々にそのことの自覚をうながしている。世の人々の漠然と感じているものをクローズアップして見せたのであろう。

そのことは身過ぎのこと、世帯もちのことになるともつとはつきりしている。西鶴は万事に気を付けなくてはいかぬということに至る所で述べているが、つまりあくまで地道にこつこつと努力することである。そこに細かく神経を行きとどかせることである。それは行動的性格とでもいうべきもので、若い頃からこつこつと努力し、その努力によって作りあげられるものである。藤市が育てた娘の性格にもそのことはよくあらわれている。そういうものが生活の中から形成されて来るといふことである。それは単なる知識として与えられるものでない。生活の中でつくられる知恵であつて知識以上のものである。むしろ性格、態度、行動力であらう。そういうものと結びついた知恵なのである。

### 3 商人のいましめ

#### 好色のいましめ

成功物語ばかりでなく西鶴は没落物語もとりあげて、何が商人として落第することになったのかを語っている。次にそれを分析してみても成功と没落を彼はどう見ていたか、いかなる能力の不足がそれをもたらしたかを明らかにしてみよう。つまり裏から見るのである。

没落にもいろいろあるが、西鶴が比較的多くとりあげているのに、二つのタイプがある。一つは初代が成功して二代目が倒産という例である。もう一つは、前半生は何かとうまくやって、それでおごりが生じて後半生で没落するという例である。まず前者から考えてみよう。

巻一の二の『二代目に破る扇の風』というのがまず没落話の第一である。

これは典型的な、初代は長者になり二代目で倒産という例でその原因は好色である。扇屋の初代は、昼は家職を大事につとめ、身過ぎには油断なく、「此男一生のうち、草履の鼻緒を踏みきらず、釘のかしらに袖をかけて破らず、万に気を付けて」という状態で一代の間に二千貫目ためこんで八十才で亡くなった。まず成功者の一人であらう。世の人もあやかりのためますかきに、拵搔をきらせる程であつた。所がその倅が二十一才で後をついで、生



れつきの長者となったが、あとかたもなく蕩尽とうじんしてしまう。そのきつかけはほんの一寸したことである。はじめのうちは親以上に始末第一を心掛けていたのだが、親父の命日に寺へ参った帰りにふと拾った手紙一通が島原つばねの局女郎への手紙であつたのが命とりとなつた。まじめ一方のこの倅がこの手紙を島原へ届けに行つたその帰りにふと遊び心が生じて、それから一流の遊び人になり、二千貫目をすっかり使い果してしまつた。これは西鶴がこの外の所でも何度も警告する好色による没落である。

巻五の三にある『大豆一粒の光り堂』も略同様な例である。この話は前半は川端の九助の発明物語である。九助は年越にまいた豆を拾い集めてその一粒を野に埋めたがそれが実を結び、十年続けて八十八石にもなり、これで初瀬街道に燈籠をつくらせたという伝説のある人物である。九助はこういう心掛けであつて家職に熱心であつたので様々な発明工夫をして世の重宝を生み出した。細こまざらえ、唐箕とうみ千石通し、後家倒しごけなどをつくり出した。また中国人のやり方をまねして唐弓とうきうというのを作り出し打綿うちわたの仕事をほかどるようにした。こうして綿商人として成功、其身一代楽もしないで人の為に仕事をして八十八才でなくなつた。これは立派な成功物語である。

その遺言状がこれまた振つたものであつた。息子の九之助に有銀ありがね一千七百貫を渡すこと、親類への片身わけに「三輪の里の姨おばの方へ手織さんの算さんづくしの木綿あわせ拾あわせひとつ、紬つむぎ地の首巻ねのこ、桑の木の撞木杖しゅもつづえ一本。吉野の下市に住みし弟の方へ三星小紋の布子に緞ぬのこの肩衣もじ、是を送るべし。岡寺の妹に花色の布子に黒き半襟みづぼしのかかりしを一つ、生平きびらの帷子かたびら添へてとらすべし。同じ

く甥に病中下に敷きたる立嶋たつしまの蒲団、中柑子ちゅうかんじの革足袋一足、是は縫ひちぎめてはくべし」などであつた。長い間仕えた手代には、「二人には置き古びし十露盤そろばん一丁取らせける。又一人には使ひなれし秤はかり一丁譲りける。」という有様で金銀のことは一行もないので皆があきれ果てた。しかし実際に九助が使用したものに大したものは何もなかったのである。四十二の厄年に絹の下帯一筋をはじめて買ったのがそのまま残っているという有様で、その始末ぶりは大したものだということがわかつた。

倅の九之助はこれを浅ましく思い、遺言状にそむいて皆に金銀を分け与えた。そのうちにふと男色、女色にふけり出し、母親の意見も聞かず嫁をとつてもとまらず、三十四才で頓死したときは借金のみ残していたという有様であつた。その遺言状は借金の返済のことであつた。

巻五の五『三匁五分曙のかね』の物語もまた好色である。美作に人の知らない分限万屋の初代は身過みすぎに始末をして一代に産をなした。正月元日の礼儀には簪入りの時の麻袴あはせを使い、四十年この方新品をととのえないという有様である。ひとり子に吉太郎というのがあつたが十三の時鼻紙に遊里用を使っているのを見て勘当してしまつた。そして妹の子を二十五六まで使い、すたれた草履を苗床の堆肥に使う心掛けをみて、養子とした。此の男はかわつていて、恠りんき氣の強い嫁をもらいたいといつてその通りにした。所が成程時々手掛者てかけものをさがしたり、男色に狂い出したとき、嫁の恠氣がはげしく世間体を考えてやめる外なかつた。所が初代の夫婦が亡くなった後、嫁が伊勢参宮をして京の風などを見て恠氣をつつしむようになったら、とたんに此の男の好色がつのつて、とうとう身代をつぶしたという。

この三つの没落話は、初代がともに大へんな長者であり、始末屋であり、家職にもすぐれた人物であるのに、二代目がともにその金にあぐらをかき好色に走り蕩尽してしまった。金というものはいつまでもあるというものでないことをあまりにもはつきり描いているので却ってあわれをもよおす物語である。

前にも紹介したが、西鶴は金銭は生きている間こそ大切だが、死んであの世へ持って行けるものでないということを述べている。この三つの話はそのよい実例だとも言える。

## 油断のいましめ

巻六の一にある『銀のなる木は門口の柵』<sup>かね かどぐち ひらき</sup>というのは好色のための没落ではない。むしろ諸事万端奢りになれて没落といった例である。年越屋<sup>としこしや</sup>の初代はなかなか立派な人で、「世の万にかしこく」分限になるそもそものは味噌を売るには蓮の葉に包んで売りはじめたという様な才覚者で、人々もまねをし出した。また、屋敷の庭に観賞と実用をかねて花が咲き実のなるものを植え、生垣<sup>くき</sup>に枸杞<sup>うこぎ</sup>や五加木を植えて食用薬用に利用するという風であった。一万三千両をためるまで、とんとん葺きの軒の低い家に住んだ。さて息子の嫁をとるとき、内儀が親仁殿にないしよで結納金はずんだりしてみえっぱりであつた所から段々おかしくなり、息子が家の普請をして棟の高い立派な屋敷を作ると客足が遠のきはじめ、それ以後することなすこと手ちがい、商売がえをすれば益々失敗をかさね、親の四十年の分限を倅の代に六年でなしにしてしまった。心得の悪いというのはこういうこと

を言うのであろうか、よくよく注意しなければならぬと西鶴は言っている。

巻三の五『紙子身代の破れ時』<sup>かみこ</sup>では西鶴は裕福な家に育った二代目というものが、いかに愚かであるかということを描いている。いわゆるふぬけといわれるような人間として出来そこなつてしまった姿を描いている。跡目をついで三十年間「勘定なしの無調無分別」という有様で湯を呑む薪もなくなつてしまふという落ちぶれようである。この男は駿河の浅間神社のあたりに住み、名は忠助というのであるが、あるとき自分に今遠江の新坂<sup>とゑとうみ にっさか</sup>（日坂）あたりまでの路銀があれば、忽ち分限になる目当てがあるというので、隣近所が合力してやるとそれをもって忠助は岑<sup>みね</sup>の観音に行く。そこには伝説の鐘があつて、これをつけば此の世で金持ちになるが死後無間地獄<sup>じごく</sup>におちるといふ。忠助はそれについて祈るのであつた。「愚かなる忠助無用の路銀をつかひて爰<sup>こゝ</sup>に来にけり。先づさし当りて是程<sup>これほど</sup>の損になりぬ」というわけで、人々もそういう心がらでは今の落ちぶれも当然だといふのであつた。

西鶴は二代目で没落する姿を数多く見ていたのであろう。没落ばなしの多くが二代目であるというのは興味あることである。これは逆に言えば、金を現在もっている人に対する警告だというようにも受けとれるのである。また、別な所で西鶴は、現在の分限者はいずれもみな若い時苦労した<sup>でっち</sup>丁稚小僧の成りあがつた人たちであると述べているが、そういう人は、いわゆる根性をもっているということも見ていたのであろう。この二代目の物語などはいずれもたあいのない倒産だといつてもよさそうである。愚かとても言わなくては言いようがなかったのではないか。

それに対して、一代で産をなし、そして倒産した例はまたちがった物語となっている。そこにも好色が破綻の原因となつてはいるが、それはおごりの結果なのである。次にそういう類型の話を紹介しよう。

### おごりのいましめ

次にその身一代の中に成功と没落を経験した物語である。第三卷の二『国に移して風呂釜の大臣』がその一つである。豊後の万屋三弥は、親の跡をついで母に孝養をつくし、渡世を大事にしていた。そしていろいろ工夫して菜種なたねを荒地に蒔いた所が花が咲き実がとれる所から思いつき、荒地を開墾し十年間無年貢としてもらって耕作させた。そして次第に金銀がたまつたので、上方へ船を廻して多くの手代にさばかせ、遂に長者となつた。その後母と同道して京へ上り、都の生活を見てから魔がさしたのか好色の道に走り出した。それでも長年の番頭のいる間はよかったが、それが亡くなつてからは益々音羽の滝の流れを汲ませてとりよせて風呂をたかせるというおごった生活をして遂に没落してしまつた。

第六卷の四には『身代かたまる淀川の漆』として与三右衛門よさうえもんの話が出ている。与三右衛門はささやかな家業であつたが、或るとき淀川に水が出たとき、漆のかたまりが流れ出して来た。これをとって密売しあわせして大もうけをした。「これらは才覚による分限にはあらず、天性の仕合なり」と西鶴は批評しているが、この幸運に与三右衛門はおごりの心が生じて淀の川から水をひいて水車を廻すなどということをやつてのけたりして、遂にこの家は断絶した。この物語には途中で計画倒産などのきたない手を用いる商人

のあることを述べている部分かなりの分量を占めている。西鶴は言う。「常にて分限になる人こそまことなれ。人のしはきを笑ふ事非なり。それは面々の覚悟に有る事なり。手を出して物はとらねど、異心に違はざる非道の人、世にまぎれて住めり」という所から、きたない手を語っている。財産を隠匿して計画倒産し、後はぬけぬけと暮すというやり方である。「さても恐しの世や」というわけである。

最後に西鶴は、近年京大阪で三千貫、四千貫の分散などという大きい桁の分散でも大して驚く人がなくなつたのも、昔とかわつて世間に金銀が多くなつたせいである。もうけも大きく、損も大きいという時代になつたが、「商ひのおもしろきは今なり」という時代とも言えるから、「世渡りに飽略そりやくをする事なかれ」と忠告している。「或長者の詞ことば(寛永四年刊行の『長者教』の中の言葉)に「ほしき物を買はず、惜しき物を売れとぞ、此心のごとくかせぎて奢おごりをやむれば、よきに極まる事なり。されば商ひの心ざしは、根ををさめて太くもつ事肝要なり」というわけである。

### 悪徳商法のいましめ

あと二つあるこの類型の物語は、ともに西鶴によつて、かなり手ひどく非難されている商法で、いわばごまかしてもうけを得ようとして結局倒産した話である。一つは第三卷の三『世は抜取りの観音の眼』、もう一つは『茶の十徳も一度に皆』(第四卷の四)である。

前者は伏見に住む菊屋の善蔵という質屋の物語である。昔、家康公が在城の頃栄えた伏見の町も今はさびれて、その町はずれに善蔵は質屋を開い

ていたのだが、そこへ質をおきに来る人の姿を見ると胸が痛む。古傘一本で六分、八月に帷子かたびら着た女房が汚れた腰巻で三分などという有様であるが、そんな小さな貸借りでも判をおすことは千貫目を借りるときと同じなのである。善蔵はこういう人々にも情ようしゃもなく商いをして四、五年の間に銀二貫目をかせぎ出した。元来この男は信心などはないのだが、遠い長谷寺の観音を信心し出し三度も開帳した。そして戸帳が大変汚れているので新しいのを寄進した。そして古い戸帳とばりを三十三間堂にかけるといつて貰って行ったが、この戸帳は古渡りこわたで柿地かきじの小釣こづる、浅黄地あさぎじの花兎はなうさぎ、紺地の雲鳳うんほうなどという模様が変っていて十端分たんある。これを茶壺の袋、表具切れなどにして売って忽ち銀五百貫をもうけた。土地の人は突然の信心をかねて不思議に思っていたが、さてはそうであったかと一ぺんに興ざめた思いであったが、それ以後は人の信用を失い酒焼しやうめ酎ちゆうの小売人に没落してしまった。西鶴も「観音信仰にはあらず、是をすべき手だて、さてもすかぬ男」といつている。すかぬは抜目ぬけめのないということであるが、しかし「あまいも辛いも人は酔はされぬ世や」とむすんでいる。

次の話は敦賀の小橋利助という茶屋の物語りで、なかなかの才覚男であったが、荷にない茶屋を考えついてくり袴えびすで恵比須の服装で茶を売って歩いた。多くの人が縁起をかついで呑んでくれたので元手を増やし、後に茶の大問屋となった。人々もこの才覚をほめ、女房の世話をする人もあったが一万両持つまでは女房はいらぬという有様であった。それがどうしたことか悪心を起し、越中越後に若い者をやって染物に在るといつて茶殻を買集

めさせ、これを茶に入れて商売をした。天がこれを咎めたのか、俄かに狂人となり、自分で茶殻茶殻とわめき出し、とうとう臨終近くなった。死ぬ間際まで、死んだあとこの金はどうなるとうらめしうにして身の毛のよだつ有様で狂死をしてしまった。この遺産は誰も気味悪がって受け取らず、旦那寺へ寄進したが、これを坊さんは茶屋遊びに使ってしまったという。

以上、西鶴があげた没落物語を見ると、二代目は殆んどが、ふわふわと好色の道におぼれて財産を蕩尽とうじんした話になっている。その中にただ一つ、世間体を気にし見栄をはった男の没落が入っている。どれも考えてみると、二代目の坊ちゃん暮しから作られた性格が災いしたように思われる。恐らく西鶴は二代目のそういう運命を見抜いていたのではないだろうか。

前半生から後半生へかけて成功から没落へと歩んだ者たちの話は、どれもがおごりにつながっているようである。たとえ好色の道に入ったとしても、そのもとにはおごりがある。これは成功を遂げた自信ともつながっているようである。その自信が更によりあくどい商法を生み出したり、抜目なさを極端にして、それが没落につながっている。西鶴にとっては世間というものは恐ろしいものに見えたのであろう。

一時の成功が貪欲どんよくを生むとまた悪心ともなり没落のもととなる。道ならぬ商売の仕方が結局は人々に捨てられるのである。西鶴は長者となるにも、また長者でなくともまっとうに生きて行くには、世間を忘れてはためであることを言いたかったのではないか。彼が随処で世の仁儀ということを述べているのは、このことなのであろう。それらをもう少し詳しく聞いてみよう。

## 4 長者の性根 — 修業の目標

### 大腹中の算用

西鶴の描いているところは、極めて地道な平凡な道を歩いた町人の姿である。一攫千金を夢みて妙なことをする商人は没落していることも描いている。そういう点を見ると、ある意味でいかにもみみっちい人間を描いているようにも見える。これは彼の基本の哲学であつたのである。

彼は永代蔵全篇を通じて金をためると述べている。が同時に「分限は才覚に仕合手伝しあわせてつだはでは成りがたし。随分かしこき人の貧なるに愚なる人の富貴、此有無の二つは三面の大黒殿のまゝにもならず」(巻三の四)という。おなじようなことは巻二の二『怪我の冬神鳴』けが ふゆがみなりという篇でも「かしこき人は素紙すがみこ子きて、愚なる人はよき絹を身に累ねし。兎角一仕合は分別の外ぞかし。然れども其身祖はたらかずして、銭が一文天から降らず地から湧かず。正直にかまへた分にも埒らちは明かず。身に応じたる商売をおろそかにせじと、—」と述べている。これは大津の町の醤油屋喜平次が世の無常を觀じて述懐したことの内容である。この篇は全体が世はさまざまというようなことを述べた篇で、森山玄好という医者は老功であつたがはやらないので毎朝お宮の絵馬をながめる時間が多かったという話や、坂本某という昔の大商人がひとつも埒のあかぬ男で人の世話になつて暮しているとか、あ

る後家が拔参りの者に合力をといつて伊勢の札を売つて十二年うそでかためたくらしの話等という世間話の篇であるが、それをみての喜平次の述懐なのである。ともかく働くこと以外ないではないかということになる。だから、

「鞍馬の多門天のをしへに任せ、百足のごとく身を働きて、其上に身代のならぬ是非もなし。天も憐み有り。諸人も不便をかくるなり。」

(巻三の四)

という思想が当然となる。

巻一の三『浪風静かに神通丸』なみかぜ じんづまるは北浜の盛況を描いている篇であるが、この盛況のことは後で述べるとして、ここに住む後家が財を蓄えたはじめは、この浜に荷あげする西国米の筒落米つつおちめ(米刺の筒からこぼれた米)を集めて其日其日を暮してそれをもとにしたという話が出ている。現実はこのようにみみっちいともいえるし、きびしいとも言えるのである。この話は、その前に北浜の盛況とそこに取引する大商人たちの大腹中が語られたあとだけに、われわれには一層ある感慨を与えるのである。

「惣じて北浜の米市は、日本第一の津なればこそ、一刻の間に五万貫目のたてり商ひも有る事なり。(中略)一分二分(銀一匁の十分の一を一分という)をあらそひ、人の山をなし、互に面を見しりたる人には、千石万石の米をも売買せしに、両人手打つて後は、少しも是に相違なかりき。」

こういう商取引の活発な中で、人々の心もまた極めて生き生きとしてい

「世上に金銀の取りやりには、預り手形に請判、慥に何時なりとも御用次第と相定めし事さへ、其約束をのぼし、出入になる事なりしに、空さだめなき雲を印の契約をたがへず、其日切に損徳をかまはず売買せしは、扶桑第一の大商人の心も大腹中にして、それ程の世をわたるなる。」

西鶴の頭の中にあつた長者はこういう人たちなのであろう。巻一の最後の所で、

「惣じて親のゆづりを受けず、其身才覚にしてかせぎ出し、銀五百貫目よりして是を分限といへり。千貫目のうへを長者とは云ふなり。」

といっているが、彼は永代蔵で描いたさまざまな長者を調査している間に、長者についての生き生きとしたイメージをもったにちがいない。前にあげたいいくつかの典型としての長者もいかにも生き生きとしている。個性的なものをもっている。それでいながら、それでは何をなすべきかということになると、極めて地道な行動となるのである。これは極めて興味のあることである。

これ迄紹介した多くの長者の人間像自体は大腹中の大商人と感じさせる人物であるが、それ以外の人物も大体そういう人々が多い。『初午は乗って来る仕合』という話は、水間寺の宝塔縁起といった物語であるが、これもなかなか気前のよい話である。水間寺では初午の時に万人が銭をかりる。「当年一銭あぶかりて来年二銭にして返し」というやり方であるが、ある時銭一貫目を借りた人がいる。何の気なしに貸し与えたが、よく考え

てみると、これはとても返って来ることはないようだ。うまくかすめとられたという噂をしていた。所が十三年目になって、元一貫の銭を一年一倍（一倍はある数量にそれとおなじだけのものを加えること。二倍の古い言い方―編集部注）と計算して八千百九十二貫にして、これを東海道を通し馬にして返済にやって来たという話である。この人は江戸の人で舟問屋をしていたが、水間寺の借銭を掛硯にいられておいて仕合丸と名付けて漁師達にわけを話して貸し与えて利をあげたというのである。

巻四の三『仕合の種を蒔銭』には、前にも一寸紹介したが、江戸の両替屋分銅屋の何某が伊勢参宮の時、新銭二百貫をととのえて、馬九頭ほどにつけて山田から間の山五十町の間にまき散らして人々を喜ばせたという話である。この人は余り人の知らない金持ちだが、その底力は薄気味悪い程であると述べている。ところでこの人がまた細かいかせぎを積みあげた人なのである。

「そもそも商ひのはじめは都伝内といふ芝居の近所に、九尺間の棚借りて銭見世を出し、諸見物の札銭を売りけるに、銀二匁三匁のうちにて五厘一分の掛込みを見て、少しの事ながらつもれば大分の利を取り、次第に両替屋となりて、是楠分限根のゆるぐ事なし。」

と述べられている。その話に続いて利発な男が隣に住んでいたが、いかさまの見せ物をこしらえて一日に五十貫も取りこんでも、一向蔵も立たないで水の泡のように消えているという話が出ている。更に、女形玉川千之丞が狂言一番一両で年三百六十両かせいでいるのに、伊勢へ引込んで死ぬ時には、昔の舞台衣裳も残らないという話も出ている。西鶴はこれに、

「金銀溜めて商人になるべき心掛けしるにもあらず。其道々をしる事人の肝心なり。」

という註釈を加えている。

細心にして大胆などという言葉があるが、西鶴の描いた人物はみなこのような人物であつたらしく思える。商売は細かく、気前は大きくというのは当時の町人の理想であつたと思われる。

前にあら筋を紹介した巻六の三『買置きは世の心やすい時』も気前のよさがもたなつて分限になつたという物語である。

このように見ると大気、大度量ということは大町人の一つの資格だというように西鶴は見えていたのであろう。それにもかかわらず、いなそれだからこそといった方がよいかも知れないが、日常の生活で一つ一つ積みあげる地道な行動が、そこへ到達する道としてまた西鶴によって強調されているのである。

こうして見ると分限、長者になるにはただ地道に働くこと以外にないという長者丸の調査通りのことになりそうである。結局地道にこつこつ働くというのは西鶴の言う心掛の問題だということになりそうである。つまりは、

「おのれが性根しよふねによつて長者にもなる事ぞかし」(巻一の三)

というのが彼や彼の時代の思想であつたということができようか。結局、

「公家は敷嶋しきしまの道、武士は弓馬きうば、町人は算用さんようこまかに、針口はりぐちの違は

ぬように手まめてまめに当座帳とうざつくべし」(巻五の四)

である。

## 商いの根性

第五巻の二『世渡りよわたりは淀鯉よどいのはたらき』の篇に、西鶴は掛取りの仕方や借金かきんの仕末のつけ方等をその道の功者の話として述べている。これも商売の能力の一つであろう。彼が「商ひ功者なる人のいへり。掛銀かけぎんは取りよきから集むる事なり」として述べていることはまず、いつでも取れるものと考えてほつておくと、案外手間どるものである。度々足を運んでも居留守をつかわれる。惣じて掛売の金の催促にはあわれみの心を出してはならぬ。日暮れになろうとあきらめずに、言葉つきはおだやかに顔は強い顔して台所の広間に腰かけて、茶も煙草ものまずに、内儀が笑顔で話かけるのも素知らぬふりしてかまどの上の肴さかなかけにかかつている鰯ぶりや雉子きじに目をつけて「こちらさんでは今年のお正月用意もすっかりお出来になつたよううで、土間のお米も土地のものとお見うけします。いつもより早い餅つきで、台所の品々も新しいよううで、お嬢さんの晴れ着は紫の飛鹿子とびかのこに紅裏で、いかにも春めいておりますね。私共は門松のかざりもの一つ揃えられません。悴あわせの去年の袷あわせにせめて綿をいれてと思つてもかないません。こちら様の様子を伺うと長者と申すより外ございません。このような正月用意は江戸にも京にもございますまい」というように義理づめに談判すると、よその支払をさしおいて払ってくれるものである。寒いからといって酒や湯づけ飯をごちそうになるようなことは一切してはならないとある。

こういう能力はなかなかの根性がなくては身につけにくいことであろう。経験を積んで修練することなのではないか。一朝一夕に当意即妙で

こういう行動ができるようにはならぬものである。まさに行動の訓練である。

また借金の仕末のつけ方を何度も経験した人が次のように言っている。掛買をするのはお互に承知の上である。たとえば新米として述べている。掛買をするのはお互に承知の上である。たとえば新米一石が六十匁とするなら六十五匁にして、而も上等なものは渡さぬものである。油も一升二匁なら二匁三分とする。なんでもこういう調子で掛売りをするのである。掛買は松の内になってからという断りも承知し、相場を利用して数や目方をごまかしても受取って、一時はこんな所へ二度と来るまいと思っても年が明けると忘れてまた来るものである。是は本意ではないが家計が苦しいからそうすることになるというのである。

貸す方に廻っても借りる方にまわつてもともかくせち辛い世の中である。このような中で一人前の商人としてさまざまな局面をのりこえるには相当の覚悟が必要であろう。当り前のことをしていたのではなかなか分限になれぬと言うのも当然であろう。余程の気迫がなくては頭角をあらわすわけには行くまい。

「或長者の詞に、ほしき物を買はず、惜しき物を売れとぞ。此心のごとくかせぎて奢りをやむれば、よきに極まる事なり。されば商ひの心ざしは、根ををさめて太くもつ事肝要なり。」(巻六の四)

と西鶴は述べているが、ほしいものを買わず、惜しいものを売るという常人ならざる心境であるとき、恐らくその商売に対する執着も人一倍強くな

るのではないか。しかも始末を主とした暮しが悪からう筈がない。商人の根性というのは、このような根本の事を胸におさめてしかも強くもつていなくてはならぬというのである。

前も紹介した巻二の五の鑑屋の話の中で、遠く山形という北国へまで商いに来た手代のうち、本物になる人は根性がちがうと述べる。

「爰に着くといなや、面若い者に近寄り、いよいよ跡月中頃の書状の通りと、相場かはりたる事はないか、所々で気色かはる物にて、日和見さだめがたく、あの山の雲たちは二百日をまたずに風とは御らんなされぬか。当年の紅の花の出来は、青葙は何程、と入る事ばかりを尋ね、干鯉の抜目のない男、間なく上方の旦那殿より身代よしとなられける」

というわけである。これだけの気迫がなくては身代よしといわれる迄にはならぬのだということであろう。むしろこういう生き方が、身代をつくるといった方がよからう。そういう意味では人とおなじようなこと、人より楽をするなどという生き方では、生き甲斐のある生活をつくることは出来ないことを語っているとも言える。攻めの人生と逃げの人生という言い方をすれば、やはり攻めの人生ということになるのか。

## 世の仁義

永代蔵の開巻第一頁に西鶴は「一生一大事を過ぐるの業、士農工商の外、出家神職にかぎらず、始末大明神の御託宣にまかせ、金銀を溜むべし。是二親の外に命の親なり」という。しかし、また、一方に、



「いかに身過みすぎなればとて人外にんがいなる手業てわざする事、適々たまたま生を受けて世を送れるひはなし。其身にそまりては、いかなる悪事も見えぬものなり。いと口惜くししき事なれば、世間にかはらぬ世を渡るこそ人間なれ。是を思ふに夢にして五十年の内外うちそと、何して暮せばとてなるまじき事には非ず。」

これは前に紹介した巻四の四『茶の十徳も一度に皆』の小橋の利助の狂死の後に言われていることであるが、その人外なる手業の例として、西鶴は次のようなことをあげている。

「たとえば利を得るにしても、工たくみて置捨ての質物しちもの、万よろずの似物にせもの、語りに合せて敷銀しきがねの付く女房をよび、寺々の祠堂銀しどうぎんをかり集め分散しさんにて済やままし、博奕ばくち仲間・山売やまうり・人參じんじんのつき付つけ、筒つつもたせ、犬釣いぬつり、乳呑子ちちのみこを養おひてほし殺し、川流れの髪かみの落取おちるなど。」

というさまざまな悪徳商売が羅列されている。つまりはじめから流すつもりで質に入れること、贗物にせものを人につかませること、詐欺師と一緒に分持参金ぶんしんの女房をもらったり、寺々に奉納した金を借りておいて分散ですましたり、博奕ばくち打ちに仲間入りしたり、いかさまの薬を売ったり、朝鮮人參しんじんの押売り、つつもたせ、犬殺し、貰もらい子殺し、溺死人どくしにんの髪を抜きとることなどを西鶴は人間のなすべきことではないとしているのである。現代の悪徳企業にもこれに類することがないとは言えないようであるが、それは人生を知らぬものやることであるというわけである。

いかに金銀をためることが商人としての生甲斐せいがいであるとしても、それには人の道をふんだ上での商売ということが大切な条件なのである。それが働くということとそこに生甲斐もあるということであろう。せい一杯生き

るということを述べているのだとも言えよう。万事に油断なくというのも、こう考えると日々時々刻々を全力投球しろという事であろう。

巻三の四『高野山借錢塚の施主』にも欲に目がくらんで計画倒産のあくどいやり方を紹介している。自分のかせぎをいい加減にして住居を立派につくり、朝夕酒宴美食を好み、交際もはなやかにし、傾城狂い野郎遊びとだらしなく金を使う。これではいくら財産があってもたまらないが、こういうやからは、最初から返さぬつもりで見せかけの信用で金を借りて、何年も前から分散するつもりで弟を別家にして、そちらへ財産をうつして、よその土地に不動産をつくっておく。こうして人に迷惑をかけて、自分は見知らぬ土地でのうのと暮すというたちの悪い奴がいる。

所がそういう世の中にも立派な人もいるものであると紹介しているのが大阪の伊豆屋という金持の話である。この人は破産したとき、全財産が借財の六割五分で、あとの三割五分をなんとか都合つき次第に返済しようと約束して生国の伊豆の大島へ行き、親類をたよって、なんとか元のようにしたとかせぎだし、大変もうけて再び大阪へ帰って来た。そうしてかつての借金を返済したが、倒産したときから十七年を経たので、どこか他国へ行って行方の知れぬ人もいた。この分の金は大神宮へお初穂として献上し、また六、七人の人は死んで子孫もない人が居たので、この分は高野山に借錢塚という石塔を立てたという。

西鶴はこういう話に感動したのか「かゝる人は前代ためしなき事なり」と結んでいる。

しかし考えてみると、藤市の始末話、樋口屋の内証の手廻しの話などは

いずれも、正直を本とした暮らしぶりなのである。それだからこそ、万事に気をつけるという生活をするのである。恐らくそれが彼等の生甲斐だったのである。そうだとすると、悪徳商法とか、計画倒産というような詐欺行為は、何かが狂った暮らし方、生き方といわなくてはならない。特に仁義をもとにしたという意識で正直な生活をするというより、本当の人生を生きる事がそのまま正直となるのであろう。

第四巻の二『心を畳込む古筆屏風』に外国貿易で日本の商人の先きの見えない商いぶりが語られている。

「一生秤はかりの皿の中をまはり、広き世界をしらぬ人こそ口惜くちしけれ。和国わこくは扱置さてきて唐とうへ投金なげかねの太たい氣き、先は見えぬ事ながら、唐土もろこし人は律義いひやくそくに云約束いひやくそくのたがはず、絹物おくちに奥口おくぐちせず、菓種やくしゆにまぎれ物せず、木は木銀かねは銀かねに、幾年いくとしかかはる事なし。」

という書き出しにはじまっている。反物の巻口と奥とを質をかえるようなことをしない中国人などと言っているが、日本の商人はそういうことが多かったであろう。時代はかわっても悪徳商人はいつもいるものと見えて、「只ひすらこきは日本、次第に針をみじかく摺すり、織布の幅をちゞめ、傘からかさにも油をひかず錢安せんやすきを本として、売渡すと跡をかまはず。身にかゝらぬ大雨に親でもはだしになし、只は通さず。」

とここからい日本商人の姿を述べている。昔、対馬ゆきの煙草というのが箱入りでよく売れたことがあった。大阪で職人に刻ませたが、当分は知れない事だろうと、下積みの方は手抜きして、しかも水に浸して渡した。海を渡るうちに固まって吸えなくなつた。中国人はこれを深く怨んで、其の次の年その十倍もあつらへたので、欲に目のくらんだ商人が、競つて長崎

へ送つたのであつた。中国の商人はそれを港に積ませておいて、去年はたばこが水につけられてよくなかつた。今年は湯か塩につけてみなさいと言つて、皆つきかえされたという。

「是を思ふに人をぬく事は跡つゞかず。正直なれば神明しんめいも頭に宿り、貞廉ていれんなれば仏陀も心を照す。」

と西鶴は結んでいる。一寸長い眼で見れば、ごまかしでは世は渡れないのだというのである。この話の後に博多の商人の金屋かなやというのが、運が悪くて一度は身代限りをしたが、長崎へ下つて荷物を仕込もうとする。と金に余裕がなくてあきらめてしまい、丸山の遊廓に行く。女郎の部屋に立派な枕屏風があるのが古物で本物なので、遊興はそちのけ、女郎に惚れたふりして通いつめ、とうとう屏風をもらつてこれをもつて上方にのぼり大名に売つて大もうけをする。こうしてまた分限になつたが、だました女郎は身請けをしてやつて女の思う男の所へ縁づけてやつたという。西鶴は「一たびは傾城をたらすといへど、是らは悪にくからぬ仕かた、其目利めききぬからぬ男、と世間皆是をほめける」と結んでいる。

こうして見ると西鶴の言いたいことは、分限という結果を求めるために人の道を誤るということは、実は利を求めるに似て逆のこと、愚かなことをやっていることになるというのであろう。プロセスとしての生き方が大切なのだというわけである。それで分限になれなくてもかまわぬではないかということになるのであろう。

第五巻の一『廻り遠きは時計細工』の篇に、長崎で金餅糖をつくり出して世の重宝となりこれがもとで分限になつたという話があるが、その話に

つづいて、丸山遊廓にあちらこちらの土地の手代が集って親方の噂をする所がある。その話は種なくて長者になったというのは一人もなかったというのである。江戸の手代は自分の主人は大名の御厄落しの金子四百三十両を拾ってから大金持ちになった。京の手代は、世間の人のやらない葬儀屋をはじめもうけた主人の話、大阪の手代はへそくり三十貫をもつ後家へ入むこしてから金持ちになった主人の話をする。西鶴は、

「何れを聞きても大分限の始め、常にては及びがたし。」  
とむすんでいる。

巻六の二の利発な養子の話のあとで、三文字屋(実在馬具商)の話をしたあとで「これらは格別の一代分限、親よりゆづりなくてはすぐれて富貴にはなりがたし」とも述べている。そこで最後の篇巻六の五では、

「人は堅固にて其分際さうおうに世をわたるは大福長者にもなおま  
さりぬ。」

ということにもなる。尤もそういう条件の上で「只金銀が町人の氏系図うじけいずになるぞかし」という金銭をもうける意義を強調し「是を思へば若き時より  
かせぎて、分限の其名を世に残さぬは口惜し」とも言うのである。

## 5 商人心の形成

### 身業の用に立たぬ芸 — 教養とは

以上あげたところでわれわれは西鶴や、西鶴と同じ時代の人々が、商人としてすぐれた人となるにはどのような態度をもっていなくてはならぬと考えていたか、ということをおお体察し得る。それが時代の人々の思想と考えてもよいであろうと言えるのは、ここにモデルになった人々が皆世の人々にもてはやされた人々であるということ、西鶴がそれをリアルに表現しているということからである。とするとここにあらわれた人々はこの時代の誰もがもちたいと願った理想のものを持っていた人と言ってよい。ただ人々はその成功の結果にのみあこがれるが、西鶴はむしろそこへ至る道筋を描いている。人々がそこから学ぶものは何か、身につけるものは何かを描いている。そこが西鶴の特色でもあり、また彼自らがこれに『新長者きんしょう教』と副題をつけた所以でもある。そしてそのことがわれわれが、これらの物語から、広い意味の人間教育の問題を読みとる事の出来る所以でもあるのである。

ところで西鶴によって把えられた長者の持つべき資格は何であろうか。それは一言にいえば長者丸として調査されたものといつてよいであろう。そうしてその服用と同時に毒断ちが出来るということである。面白

いと思われることは、長者丸というのは極めて簡単な丸薬であるということ、そしてそれはあくまでも行動的なことだということである。つまりそれを年中服用できるかということが、一番大切な問題のようである。つまり朝起きをして、仕事をして、夜まで働き、節約をして健康に注意せよということである。極めて当り前の事であって、或意味では何の変哲もないことである。

そしてこれと反対に毒断ちというのが極めて数が多い。しかもかなり具体的にあげられている。これも断つということができるかどうかという点ではやはり行動的な事なのである。

ところでこの様に見て来ると、西鶴の長者への教というのはいかにも平凡である。まことにあつけない。これは現代の人々、少くとも現代教育の強調していること或は力をいれているところとは大分異なっている様に思われる。それは三百年の時間の差があるから、その中味に差が出て来たなどという事ではない様に見える。西鶴の時代は成程商業資本主義時代の初期とも言うべき時代であり、現代は高度資本主義とか、脱工業時代とかいわれるので、そこに大きな違いがあることは当然であろうが、そういう違いとは異なる違いであるように思われる。むしろ根本的な方向の違いのように思われる。非常に大きな把え方をすれば、西鶴の時代の町人と現代人とは同じ系統に属する人間といってよい。否我々は町人の子孫といってよい。封建の世であろうと、現代民主社会であろうと、町人としての性格は一貫したものがあつた筈である。そうならば町人的人間像のあり方についてもう少し西鶴と我々に共通のものがあつてよいように思うが、どうもか

なりかけはなれているような気がするのは、私の読み間違いであろうか。

明治以後われわれの社会は、欧米の先進諸国の近代知識を取り入れるために、社会の全力をあげて知識を求めた。教育もそのすべてを知識の普及に置いたといつてよい。あらゆる欧米の文化を知識として輸入し、採取しようとした。そうして一世紀の間にその大きな成果として、現代のいわゆる経済大国日本を作りあげた。この成功は我々に、我々の教育への絶大な自信を与えていることは確かである。またその教育の性格は極めて知識主義的である。しかもそれ以外の教育の形が考えられない程この教育があらゆる所に行き渡っている。

こういう事情で、商人の教育というものを考えるとき、我々は商人として必要な知識は何か、どんな技術をもっていたらよいかと考えるのである。ところが、西鶴が言っていることは全くそういうことではない。むしろ知識技術などというものを否定しているかのように見える。誠に平凡な、日常生活の早寝早起きの事でしかないように見える。これを昔は単純だったという様に考えるのも一つの理解の仕方である。しかしそれでよいのであろうかという疑問が起こつて来るといふのが、いつわらざる実感である。一体西鶴が『新長者教』と名づけて説こうとしたことはどういうことなのであろうか。

有名な三井高房の『町人考見録』に「商人は賢者になりては家衰ふ」という言葉がある。是に続いて「一日も仁義をはなれては人道にあらず、然るとて算用なしに慈悲過たるも又愚なり、仁義を守り、軍師の士卒を恵むがごとく、<sup>あきない</sup>商に利有やうに心得べし」とも言っているが、町人の心を巧に語っている言葉として多くの人に知られている。こういう見解に対し

である時期には、封建時代の町人が卑屈であつて、高い識見をもつ意欲を失つた所からこのような思想が生れたというような解釈がなされたことがある。しかしこの解釈はどうであらうか。三井高房の『町人考見録』自体が逆に堂々たる見識を示して決して卑屈などではない。最も現実的であり、しかも人間としての生き方を心得ている態度をもっているといえよう。賢者になりては家衰うというのは、我々から見ると三井高房が当時の学問というものに対しての皮肉の様に聞えるのである。当時既にいわゆる学問が社会における実質的意義を失つて、一つの虚飾になりつつあったことは多くの人の知っているとあるが、そういう虚飾の学、虚飾の教養に対する愛想づかしでもあつたと思われるのである。

これは西鶴の時代よりもう一寸時代が下つた享保の頃のことであるが、西鶴はそういうむつかしい論議はともかくとして極めて直感的に、当時の人々が教養と考えていたものに対して人生の真実の側からの見解を示しているのである。しかも理くつでなく事実を描いているのである。これは現代のある種の教養といわれるものについても当てはまるように思われる。

卷二の三に『才覚を笠に着る大黒』という物語があるが、この中で西鶴は、商人の身すぎに役立たぬ道楽のことについて詳しく語っている。東の大黒屋善兵衛(実在)の倅新六が大家の坊ちゃん育ちの例にもれず色遊びに狂つて結局勘当される。そして京に居れなくなり江戸へ下る。この途中では乞食同然の姿となる。犬の死骸を焼いてこれを狼の黒焼として売りながら江戸へ来る。これも一つの才覚であるがと西鶴は言う。こうして品川に来て東海寺門前の乞食三人から落ちぶれた由来を聞く。一人は大和の竜

田の里の者で酒造りをしていたが、無分別に江戸へ来て商いをしようと思つたが失敗した話である。もう一人は江戸の者で大家主であつたが、始末を忘れてかくはなつたと語る。さてもう一人の語ることが、修業と道楽に關しての話なのである。

泉州堺の者であつたが「万にかしこ過ぎて芸自慢して」この江戸へやつて来たのであつた。この男の修業の中味は大変なものであつた。

「手は平野仲庵に筆道をゆるされ、茶の湯は金森宗和の流れを汲み、詩文は深草の元政に学び、連俳は西山宗因の門下となり、能は小島の扇を設け、鼓は生田与右衛門の手筋、朝に伊藤源吉に道を開き、夕べに飛鳥井殿の御鞠の色を見、昼は玄斎の碁会にまじわり夜は八橋検校に弾きならい、一節切は宗三に弟子となりて息つかい、浄瑠璃は宇治嘉太夫節、踊は大和屋の甚兵衛に立ちならび、女郎狂いは島原の太夫高橋にもまれ、野郎遊びは鈴木平八をこなし、噪ぎは両色郷の太鼓に本粋になされ、人間のする程の事、其道の名人に尋ね覚え」

という状態である。これは西鶴の咄なのであるが、ともかくありとあらゆる芸道の奥儀をきわめているという人間像なのである。

だから「何をしたればとて、人の中には住むべきものを腕だのみせしが」と相当の自信をもつて江戸へ出て来たのである。ところがこれが「かゝる至り穿鑿、当分身業の用には立ちがたく」という現実につかつてしまふ。こういうことでは生活は成り立たないというわけではじめてさとするのである。「十露盤をおかず秤目しらぬ事を悔しがりぬ。武士づとめは勝手をしらず、町人奉公もおろかなりとて追出され」てしまう訳である。「諸

芸のかはりに身を過ぐる種を教へおかれぬ親達をうらみける。」これが乞食になつてはじめてしみじみ思い知られることであつたのである。

新六はこういう話を聞いて心細くなる。皆さんのような利発な人がどうして、このように浅ましくなつたのかと今更不思議に思う。そうすると「いかなかなこの広き御城下なれども、日本のかしこき人の寄合ひ、錢三文あだにはまうけさせず、只銀をためる世の中」といわれるのである。前の大和竜田の里の者が「是に付けても仕付けたる事を止めまじき物ぞ」というわけもよくわかるのである。新たな事を何かとさがしてもなかなかあるものではないということになる。そこで結局は家職、身過ぎの仕事に専一に心をいれなくてはならぬということになる。

事実新六はこのヒントから木綿の切売りで手拭を下谷の天神の手水鉢のもとで売り、こつこつとかせいで十年たたぬ間に五千両の分限者になつたのであつた。

西鶴は二代目のふぬけの倅たちが身すぎを知らずにいたずらに遊びほうけて、よけいな事ばかりを学んで結局うだつの上らぬ人生を送っているのが余程気になつたのであろう。巻六の二『見立てゝ養子が利発』という篇にも芸道にこつて没落した長者の息子の事を記している。京都の室町のれっきとした家の息子が、何も商売せず利息で暮して十五年のうちに財産をなくして江戸へ下り、結局仕事がなくてまた京へもどつて謡、鼓の指南でようやくその日を送る例をあげている。この男の芸道修業がまた大変なもので、謡、碁、浄瑠璃、茶の湯、即興の軽口、連俳、香等々行くとして可ならざるなしというように書いている。こうして「何ひとつくらからねど、身過ぎの大事を知らず」というのが没落の原因であつた。

結局身過のことを勉強すること以外にないのだと西鶴は言うのである。

「ひそかに思ふに、世に有る程の願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事天が下に五つあり(地水火風空の五つによつてなる生命)。それより外はなかりき。是にましたる宝船のあるべきや。見ぬ島の鬼の持ちし隠れ笠かくし蓑も、暴雨の役に立たねば、手遠きねがひを捨てゝ、近道にそれぞれの家職を上げむべし。」(巻一の二)

ということになる。

「今此娑婆に掴みどりはなし。我頼むまでもなく、土民は汝にそなわる。夫は田打ちて婦は機織りて、朝暮そのいとなみすべし。一切の人此のごとくと、戸帳ごしにあらたなる御告なれ共」(巻一の二)「智恵才覚といふも世わたりの外はなし。」(巻五の二)

「かしこき人は素紙子きて、愚なる人はよき絹を身に累ねし。兎角一仕合は分別の外ぞかし。然れども其身祖かずして、錢が一文天から降らず地から湧かず。正直にかまへた分にも埒は明かず。身に応じたる商売をおろそかにせじと」(巻二の二)

「朝夕の煙を立つる世帯持ちは、よろづかやうに氣を付けずしてはあるべからず。此男生れ付いて吝きにあらす。万事の取廻し人の鑑にもなりぬべき願ひ」(巻二の一)

これは藤市の事を述べたことであるが、世帯の持ちように万事に氣をつけることを述べた所である。藤市自身も若い人々に対して、「よくよく万事に氣を付け給へ」と忠告している。こういうこと以外には町人としての生き方はないというわけである。

これが町人の生き方であるというのが、西鶴の言いたいことなのである。町人の人間像はこれであるというのであろう。つまり町人の教育の目標といってもよい。町人の修業における到達目標であるといってもよい。気をつけ続けることによって、次第に萬事に気が付くようになり、最後に人の気付かぬことに気付き、独創的な商法や身過ぎの道をたどるようになると言うのであろう。だから気を付ける態度こそ大切なのである。

### 商いの知恵 — 行動力の形成

西鶴が三井八郎右衛門の物語を書いている中に、商売に油断のない手代どもの働きぶりを述べているところがある。

「棚守・手代それぞれに得意の御屋敷に出いり、ともかせぎに励みあひ、商売に油断なく、弁舌・手だれ・智恵・才覚・算用たけて悪銀をつかまず、利徳に生牛の目をもくじり、虎の御門の夜をこめ、千里に行くも奉公、朝には星をかづき、秤竿に心玉をなして、明暮御機嫌とれ共——(巻一の四)」

と述べているが、これは商人として働く働き方の内容であつたと見てよい。油断がないというのは常平生、たえず気を張っていることであらうが、その気を張る中味は次にならべられている。弁舌のこと、つまり口の聞きようであらう。手だれというのは熟練していることであるから、経験のことと言つてもよい。知恵・才覚とか算用たけてとか悪銀をつかまないとかというのも主として経験の中で養われる能力であらう。そうしてそれらの能力を朝から晩まで働かしてというように述べているから、いかにも全力投

球している様子が出てくる。これが商人の働きぶりなのである。

もうすこしその働きぶりの中味についてしらべてみよう。第六巻の二『見立てゝ養子が利発』という篇に彼が扱っているのは、商売上手ということである。

まず書き出しが財のたくわえのある浪人が瀬戸物の店を出しているが、値段をきかれると百文のものを百文と答えるだけで、値切つても負けないので三年余り一つも売れないというのを西鶴は「是を思ふに商ひ上手はあるべき事也」と評している。さて本筋の養子の話であるが、京橋に銭と金銀貨を両替する店の主人が或る祝儀の席に鯛を出した所、小僧の一人がそれを値ぶみしながら食べる。それを主人が見所のある者と養子にする。この時の話がまたかわつてゐる。親もとへ相談に行こうという、そんな無駄遣いをするなという。それよりこの家に借金があるかないかも私は知らないでは養子になれないという。そこで有金二千八百両をしまいこんでゐるのを見せると、小僧が言う。「利発なる小判を長櫃の底に入置き、年久しく世間を見せ給はぬは商人の形氣にあらず。この心から大分限になり給はず」というのである。

さてそれからこの利発な養子は次から次へと知覚・才覚を働かす。親夫婦が寺参りの折は、納所坊主に近よつて散銭を買いなさい、供のでつちは菓子山椒でも持つて行つて、お説教前に売りなさい、また説教に集る人の下足番をしなさいなどという。こうして「後には思ひの外なる智恵を出して」小船に浴室をつくつて風呂屋船としてもうけたり、松脂と桐油でつくつた瀝青ぬりの皿、ちりめん紙の煙草入を売り出すなど、人の気のつかぬことをやってのけて、十五年たため中に三万両の分限になつたという

話である。

これは西鶴の言う知恵・才覚や算用にたけるといふことの実体であろう。商人の形気かたぎというのもこういうことであろう。利徳に生牛の目をくじるといふのがあったが、そういう眼力をもっていることであろう。ありとあらゆる所に目をつけて利をさぐることに、これが西鶴の言う「万事に気を付け」といふことであろう。このような能力はなまじつかな知識ではない。それこそ商売に打ちこまなくてはなるまい。そういう所でつくられて来る商業的センス、つまり商品を動かして手数料をとるといふことから一切を眺めるセンスであろう。それはある意味で合理的な感覚といつてもよからう。そういう感覚で一切が眺められるように透徹した目になると、そこに情性で暮している人々と異つたものが見えて来る。それが新たな商いとなる。つまり獨創性というような言葉でよばれるものであろう。こういうものは単なる知識でないことは確かであろう。萬事に氣をつけるといふことは、こういうことである。油断なくといふのもそうであろう。そうなることこの才覚とか、利発とか言うのは、生活の中からにじみ出た行動力につけたものといつてよいのではないか。

そういうものは、現代のわれわれが問題にしているような書物の上の知識でないことは確かであろう。人生の知恵、商いの知恵というものは、それ自体行動力なのであって、それ以外の何物でもないのである。

### 奉公は主取り ― 生活は形成する

このような商人感覚はどのようにして育つのであろうか。西鶴はそのこ

とについてどういふように事実を見ていたのであろうか。

第一巻の三で「兎角とかくに人はならはせ」、「奉公は主取しゅとりが第一の仕合しあわせなり」と言っているが、その理由は、一人前の商人となるのは土地の繁昌はんしょうしている所に住んでいるなどということとは関係ないことで、主体的環境が大切だと言う。そして次のような事実をあげている。北浜のほとりに職人が住んでいたが、そこに弟子が二人いて、やがて彼等も独立したがやはり親方と同じ鍋蓋ひうちや火打箱ひうち作りしかやらないでいる。若しこの土地でもつと大どきに働いて修業していたら、相当の商人になつたであらうに思うとふびんだと述べている。つまり人間はしつけられ方でよくも悪くもなる。立派な商人根性をもつようにもなり、そうならない時もあると言つのである。このことは西鶴においてはかなりはつきりした思想であつたと思われる。或は一つの信念であつたのではないか。前に紹介した没落物語の殆どが、二代目のいわゆる坊ちゃん育ちの例であるのを見て、この思想は永代蔵全篇を貫いているといつてもよいようである。

前に紹介した第五巻の五の『三匁五分曙さんもんごぶんしるぎのかね』という、嫁の恠氣わざがきがなくなるとともに好色の虫が出て家をつぶした物語の中で、西鶴は「惣じて親の子にゆるがせなるは、家を乱すものとゐなり。随分厳しく仕かけても、大かたは母親一つになりて拔道ぬきみちをこしらへ、其身に過ぐる程の惡遣わるづかひする事ぞかし。烈はげしきは其子がため、温ぬるきは怨あだなり。」と言っている。きびしいしつけが商人氣質を育てるということである。二代目はとかくそういう修業のチャンスに恵まれないので、家をつぶす結果になるのである。

永代蔵の多くの話の中でも、西鶴がとくに愚かな人間の代表的人物のよ



うに描いている呉服屋忠助の話が『紙子身代の破れ時』(巻三の五)の  
 つている。この男の親は駿河の本町で有名な身代をつくりあげたが、忠助  
 は「利発生れおとりて」という有様で三十年間「勘定なしの前分別、十露盤  
 の玉にもぬけて」すっかり身代をすってしまった。四十七才になったとき  
 人々が年をせんさくしたことがあったが自分は三十九だという。どうして  
 かといえ元日に雑煮も祝わず松飾りもせず、暦ももたずという年が八年  
 あったという貧しさ。また一寸した路銀があれば忽ちに分限になるとい  
 うので長屋のものが持ちよって渡してやると、その金をもって観音様におま  
 いりして、今一度長者になし給えと祈るのであった。これを西鶴は、この  
 鐘を突いて分限になるのなら、今の世の人は、末の世には蛇になろうと、  
 地獄に行こうと誰もがご参りして願うだろうにと笑っている。

「愚なる忠助無用の路銭をつかひて爰に来にけり。先づさし当りて  
 是程の損になりぬ。駿河に帰りて語れば、聞く人毎に、其心からあ  
 れ、と指さしける。」

多くの人に成程愚かだとあきれたと語っている。この愚かな忠助も  
 娘が孝行娘で、そのおかげで後半生は安楽に暮したとむすんである。

「若い時心をくだき身を働き、老いの楽しみ早く知るべしとうそつか  
 ぬ大黒殿の御託宜なり」(巻四の五)

やはり若い時の苦勞が大切だということに落ち着く。その苦勞が商いの  
 センスを育てる。

確かに商人気質、或は商人としての能力は若い時ぼんやり暮らして出来  
 るものではないのであろう。それは世の人々の運命の変転を見ていて西鶴自  
 身がしみじみと感じとっていたことなのであろう。第一巻の三『浪風静かに

神通丸』で北浜の盛況を語り、そこで取引をする大商人たちのことを、

「昔こゝかしこのわたりにて、纔なる人なども、その時にありて且  
 那樣とよばれて、置頭巾・撞木杖・替草履取るも、是皆大和・河内・  
 津の国・和泉近在の物つくりせし人の子供、惣領残して末々をでつ  
 ち奉公に遣はし置き」

という人達の後身なのだという。農家出身で丁稚奉公をした人達が一人前  
 に出世してなったのが多いという現実を西鶴はよく見ていた。

「鼻垂れて手足の土氣おちざるうちは、豆腐・花柚の小買物につか  
 はれしが、お仕着二つ三つ年を重ねけるに、定紋をあらため、髪  
 結振を吟味仕出し、風俗も人のやうなるにしたがひ、供はやし・能・  
 舟遊びにもめしつられ、行く水に数かく砂手習、地算も子守の片  
 手に置き習ひ、いっとなく角前髪より銀取りの袋をかたげ、次第送  
 りの手代ぶんになって、見るを見まねに自分商いを仕掛け」

と一人前になって行く様子を描いている。こういう修業の途中で妙な氣を  
 おこして失敗をし、結局一生を台なしにするものもある。またしかし立派  
 にこの修業期間をたえて一人前になって行く人もいるのである。それはも  
 う本人の性根だと西鶴は言っている。

「おのれが性根によつて、長者にもなる事ぞかし。惣じて大阪の手  
 前よろしき人、代々つゞきしにはあらず。大かたは吉蔵・三助がな  
 りあがり、銀持になり、其時をえて、詩歌・鞠・楊弓・琴・笛・鼓・  
 香会・茶の湯も、おのづからに覚えてよき人付合、むかしの片言も  
 うさりぬ。」

大げさに言えば、西鶴の眼には、浮世のならいというか、榮枯盛衰がは

つきりうつっていたのであろう。それが、若い時の苦勞ということを書いていると考えてよい。苦勞するとはそれだけ自分が利口になることだ、そうならなければ、このせち辛い世の中で長者になれるものかということなのであろう。

しかしこの苦勞とは、現代語で言えば具体の場における行動そのものであり、張りつめた神経で責任ある行動によってその場の事柄、目前の仕事进行处理していくことであらう。そういう神経の使い方が、習性となつて、仕事进行处理する能力が身につくのである。

ここでは西鶴は、長者丸の話であれ程否定した道楽を必ずしも否定していない。「銀持かねもちになり、其時をえて」詩歌、鞠、楊弓、その他茶の湯や遊芸も自然におぼえて、上流の人々と付合うのが理想であると説いている。ということとは、生活に一つの核としての算用が立ち、それで立派に一人前としてごまかしのない生活があれば、その上にさまざまな道楽も結構だといふのである。そしてこの生活のバックボーンを身につける努力こそ若い頃の苦勞というものなのであると西鶴は言っているのである。若い頃バックボーンのないままに道楽に入ると、人間としての体をなさないので、毒断ちの必要を説いているのである。生活の中からにじみ出た道楽とも言うべきであらうか。そういう一つの統一ある生活とその構造を西鶴は見ていると思われる。

第五巻の四『朝あしたの塩籠しおかご夕ゆうの油桶ゆづ』という篇で常陸のこがねが原という

所の長者は律儀に働いて朝は酢醬油くわを売り、昼は塩籠しおかごを荷い、夕ぐれは油の桶にかわり、夜は杓くわを作つて馬かたに商い、若い時から一刻もむだにせず長者になった人である。この人は大変慈悲深く、そのためにこの人の

所を頼つて浪人などが身を寄せていた。この浪人達の生活の仕方を見ると、森島某は学があつて長者の四人の子供にお礼心で四書の素読をさせていた。また、木塚某は次男坊をそそのかして色道を教えた。宮口某は細工物を作つて売りさばっていた。大浦某は小唄や小舞にふけており、岩根某は仏の道を信仰し、赤堀某は鉄砲をもつていて密猟をしていた。その後これらの人々の行末をしらべてみると、書物好きの森島は神田で太平記の勸進読み、好色の木塚は太鼓もち、細工好きの宮口は小間物売り、音曲好きの大浦は芝居の一座に入つて御尤という端役、鉄砲好きの赤堀は仕官がかった。

こういうのを見て西鶴は

「是を思ふに、銘々家業を外になして、諸芸深く好める事なかれ。是らも常々思ふ所の身とはなりぬ。かならず人にすぐれて器用といはるゝは、其身の怨あだなり。(中略)町人は算用こまかに、針口の違はぬように手まめに当座帳付くべし」

というように結んでいる。若い頃のならないが性となるということを書いたかったのであろう。

## むすび

以上西鶴の描いた元禄頃までの商業の現実とその中における商人のさまざまな行動を通して、商人としてまっとうな人生をおくった人々が、いかなる修業により、いかなる心をつくりあげて行ったのかをさぐってみたのである。それを通して西鶴がこの永代蔵に『新長者教』という副題をつけた理由を考えてみるとさすがに、彼は確かな人間観、人間形成観をもっていたように思われる。

リアリストである彼は、長者としていわゆる成功した人、それを願って途中で挫折した人々、更に途中で歪んだ道に迷いこんだ人などの行動の底に何があったかを非常に深く把握している。決して表面的なことではなく、一人一人の心の底に働くもの、われわれの言葉でいえば環境といわれるもの、社会といわれるものをよ

く把握している。しかし結局は、それを最後に結集して、一人一人の人間の行動が何であつたかを見ている。

そしてその行動が、無常の人生の中で、ただ一つの真実として十分に生きるということを問題にしている。たまたまその生きる手段が町人の場合には金銀を扱うということなのである。それを扱うことにおいて、一人一人の生命が真に燃焼しているかどうかを問題にしているのである。知恵、才覚、始末というもこの生命の燃焼の通路だとも言えよう。それは世の中、世間という人々の中で生かされなくてはならぬ。その結果として世の重宝となることが生きたあかしなのである。だから金をためるということもまた究極のものではないともいえる。死んでは役立たぬものだというのはそれであろう。

人は十三才頃までは子供、それ以後二十五才までが修業、それから四十五才までに一生の家をかため、それ以後遊樂することになりまっているのだという。生涯教育の計画だとも言えるようである。